

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第10集

九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

X

平ノ前城跡

2019

長崎県教育委員会

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第10集

九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

X

ひら の まえ じょうあと
平ノ前城跡



卷頭カラー① 調査区遠景写真（西から）

※画面中央に平ノ前城跡。遺跡は鈴田川と小川内川に挟まれた低丘陵地に位置する。鈴田峠を越えると諫早市に入る。周辺にはのどかな田園風景が広がる。



卷頭カラー② 調査区遠景写真（右が北）
平ノ前城跡から大村湾を望む



卷頭カラー③ 調査区近景写真（西から）

発刊にあたって

本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴い実施した大村市平ノ前城跡の発掘調査報告書です。

平ノ前城跡は、大村市と諫早市の市境に位置する中世山城で、戦国時代に活躍した大村氏と西郷氏との軍事的な緊張関係が窺える遺跡です。

また、鈴田川下流域周辺や諫早市を流れる本明川流域では、中世山城が点在しており、当時より鈴田地区や本野地区が交易や軍事・交通の要衝地であったことを物語っています。

発掘調査では、中世の搬入土器として知られる東播系土器や16世紀頃の貿易陶磁が出土したほか、山城の遺構として曲輪、堀切、切岸、土星遺構などを新たに確認いたしました。文献資料では明らかにされていなかった平ノ前城の縄張りを復元できたことや周辺部に隣接する山城との関係を考察するうえで貴重な資料を得たことは大変意義深いものとなりました。この調査成果が学術資料として広く活用され、さらには地域の文化財や郷土の歴史を理解する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を支援していただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、大村市教育委員会、発掘調査に従事された作業員の方々をはじめ、調査に快くご協力いただきました近隣住民の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

長崎県教育委員会教育長

池 松 誠 二

例　　言

- 1 本書は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が実施した九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は、長崎県教育委員会が独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部九州新幹線建設局の依頼を受け、平成 27 年度～平成 29 年度にかけて実施した。
- 2 今回報告する調査内容は、以下の通りである。
 - (1) 平ノ前城跡は、大村市平町 1543-3 に所在する。
 - (2) 平ノ前城跡の試掘調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が実施した。また、本調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が主体となり、発掘調査の一部を民間の発掘調査会社に業務委託した。平成 28 年度第 1 次調査は、発掘調査の一部を株式会社島田組に委託した。また、平成 29 年度第 2 次調査は株式会社プロレリック、平成 29 年度第 3 次調査は株式会社島田組にそれぞれ調査の一部を委託した。
 - (3) 平ノ前城跡の発掘調査期間は以下の通りである。
 - ①試掘調査：平成 27 年 2 月 9 日～平成 27 年 3 月 6 日
 - ②本調査：平成 28 年 12 月 7 日～平成 29 年 2 月 8 日（第 1 次調査）
 - ③本調査：平成 29 年 5 月 24 日～平成 29 年 8 月 31 日（第 2 次調査）
 - ④本調査：平成 29 年 11 月 15 日～平成 30 年 1 月 30 日（第 3 次調査）
- 3 本書に掲載した調査時の写真は、中尾篤志・白石渙洋・村川逸朗・一瀬勇士が撮影し、遺物写真を一瀬が撮影した。
- 4 本書の執筆・編集は一瀬が行った。その際、調査担当者が作成した範囲確認調査及び本調査の結果報告の記述を参照した。
- 5 遺物の実測は、中尾、一瀬及び中山栄吾、成田万里、横田愛子が行い、図面のトレースに際しては山崎円、鈴田粂子の助力を得た。
- 6 本書で用いた調査・整理における土層及び土器の色調観察は、小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖（34 版 2011 年度版）』に準拠した。
- 7 本書の作成にあたり、以下の文献を陶磁器等の編年の基礎資料として用いた。

貿易陶磁：上田秀夫 1982 「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2
森田 勉 1982 「14～16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2
小野正敏 1982 「15～16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2

肥前陶磁：九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会 10 周年記念）
- 8 本書で用いた方位はすべて座標北であり、国土座標は世界測地系による。
- 9 本調査の調査番号は、調査年度順に「HNM201611」「HNM201703」「HNM201711」である。
- 10 本書で掲載した遺物・図面・写真及び調査記録は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所久原現場事務所に保管している。
- 11 本書では以下の遺跡略号を使用した。

TP（試掘坑）、KW（曲輪）、SW（石積み）、SX（不明遺構）
- 12 調査に当たっては大野安生（大村市教育委員会文化振興課長）、林隆広（大村城南高校教諭）の両氏から指導、助言を得た。
- 13 出土した金属器は長崎県埋蔵文化財センターにおいて保存処理を行った。

本文目次

卷頭図版

I 調査の経過

1 調査に至る経緯	1
(1) 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要と沿革	1
2 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う発掘調査の経緯	
(1) 試掘調査・範囲確認調査の経過	4
(2) 平ノ前城跡範囲確認調査の概要	4

II 本調査の成果

1 概要

(1) 本調査の経緯	9
(2) 調査の方法	9
(3) 整理作業の概要	10

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境	11
(2) 歴史的環境	11

3 調査組織

	16
--	----

4 日誌抄録（本調査）

(1) 平成 28 年度調査第 1 次調査 [HNM201611]	17
(2) 平成 29 年度調査第 2 次調査 [HNM201703]	17
(3) 平成 29 年度調査第 3 次調査 [HNM201711]	18

5 基本土層

	19
--	----

6 遺構と遺物

(1) 石積遺構（SW）	25
(2) 切岸遺構	29
(3) 土塁・堀切・堅堀	29
(4) 第 3 次調査の状況	38
(5) 包含層出土の遺物	39
(6) 小結	53

III まとめ

附編 領境に位置する鈴田村と平ノ前城跡

挿図目次

第1図	九州新幹線西九州ルート概要図	1
第2図	範囲確認調査対象地位置図 (S=1/120,000)	3
第3図	範囲確認調査調査坑配置図 (S=1/2,000)	5
第4図	範囲確認調査調査坑土層実測図 (S=1/40)	6
第5図	TP7 出土遺物実測図 (S=1/1)	8
第6図	調査区グリッド配置図 (S=1/600)	10
第7図	遺跡位置図 (S=1/200,000、S=1/25,000)	13
第8図	周辺遺跡分布図 (S=1/40,000)	14
第9図	北側通路部東壁土層実測図 (S=1/60)	20～21
第10図	北側通路部西壁土層実測図 (S=1/60)	22
第11図	土層実測図① (S=1/60)	23
第12図	土層実測図② (S=1/60)	24
第13図	遺構配置図 (S=1/250)	26
第14図	第1次調査東西南北ベルト・トレントチ土層実測図 (S=1/60)	27
第15図	切岸遺構実測図① (S=1/60)	30
第16図	切岸遺構実測図② (S=1/60)	31
第17図	切岸遺構実測図③ (S=1/60)	32
第18図	切岸遺構実測図④ (S=1/60)	33
第19図	切岸遺構実測図⑤ (S=1/60)	34
第20図	切岸遺構実測図⑥ (S=1/60)	35
第21図	切岸遺構実測図⑦ (S=1/60)	36
第22図	平成29年度第3次調査区 (S=1/400)	37
第23図	第3次調査A・Bトレントチ土層実測図 (S=1/40)	38
第24図	出土遺物実測図① (S=1/3)	40
第25図	出土遺物実測図② (S=1/2、1/3)	41
第26図	出土遺物実測図③ (S=1/3)	42
第27図	出土遺物実測図④ (S=1/2、1/3)	45
第28図	出土遺物実測図⑤ (S=1/3)	46
第29図	出土遺物実測図⑥ (S=1/2)	47
第30図	出土遺物実測図⑦ (S=1/2)	48
第31図	出土遺構・遺物割合	52
第32図	出土遺物細目別割合	53
第33図	平ノ前城跡縄張図 (S=1/2,000)	56
第34図	大村氏系図	62
第35図	平ノ前城周辺字図	62

図版目次

図版 1	範囲確認調査状況写真（試掘調査坑）	7
図版 2	調査状況写真	18
図版 3	土層写真	19
図版 4	石積構造測定図・東西南北ベルト土層写真	28
図版 5	平ノ前城跡近景（南から）	29
図版 6	第3次調査トレンチ調査状況	38
図版 7	4区 SX写真（北西から）	38
図版 8	出土遺物①	40
図版 9	出土遺物②	45
図版 10	出土遺物③	46
図版 11	出土遺物④	48
図版 12	出土遺物⑤	49
図版 13	伝鈴田道意墓	62
図版 14	平ノ前城跡周辺の主な史跡	63

表目次

第1表	範囲確認調査出土遺物観察表	8
第2表	周辺遺跡一覧表	15
第3表	出土土器観察表	50
第4表	出土磁器・陶器観察表	51
第5表	出土石製品観察表	51
第6表	出土金属製品観察表	52
第7表	出土遺物量一覧表	52
第8表	出土遺物内訳表	52
第9表	出土土器・陶磁器内訳表	53

I 調査の経過

1 調査に至る経緯

(1) 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要と沿革

①概要

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）は、福岡市と鹿児島市ならびに長崎市を結ぶ整備新幹線計画（九州新幹線）のうち、福岡市と長崎市を結ぶルートを指す（第1図）。

現在の計画としては、博多駅～新鳥栖駅間（約 26km）は鹿児島ルートと路線を共有し、新鳥栖駅～武雄温泉駅間（約 51km）は在来線を活用する。武雄温泉駅～長崎間（約 66km）はフル規格の新幹線である。使用車両として、車輪の幅を走行中に変更できるフリーゲージトレイン（以下 FGT）を導入する計画だったが、FGT の開発が遅れ、2022 年度までの量産化が間に合わないことから博多駅～武雄温泉駅間の在来線と武雄温泉駅～長崎駅間の新幹線を武雄温泉駅で乗り継ぐ「リレー方式」で 2022 年度内に暫定開業することとなった。現在の在来線特急「かもめ」と比べると乗り継ぎ時間を含めて 30 ~ 45 分程度の時間短縮が図られる。

建設主体は鉄道建設・運輸施設整備支援機構（鉄道・運輸機構）である。平成 8 年（1996）に決定した新スキームに従い、開業後も鉄道・運輸機構が駅・路線・車両基地などの設備を保有して、受益額の限度内で営業主体の九州旅客鉄道（JR 九州）から賃料の支払いを受ける制度である。不足する工事費用については 3 分の 2 を国が、3 分の 1 を沿線自治体（県・市町村）が負担する。

車両基地は長崎県大村市の竹松町・沖田町付近に建設され、新幹線に伴う県内駅は長崎、諫早、新大村（仮称）である。車両基地予定地は竹松遺跡と重なり、埋蔵文化財調査対象となった。

平成 23 年度は長崎県埋蔵文化財センターが発掘調査主体となり、平成 24 年度から 28 年度にかけては、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が約 10 万 m²（路線部分を含む）の調査を行い、平成 28 年度から発掘調査報告書の刊行を継続して実施している。



第1図 九州新幹線西九州ルート概要図（長崎県 HP を基に作成）

②沿革

整備新幹線とは昭和45年（1970）に成立した全国新幹線鉄道整備法に基づいて、国鉄民営化後に施工・開業された路線を指す。

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）は昭和47年7月（1972）に「建設を開始すべき新幹線鉄道の路線を定める基本計画」（基本計画新幹線）に北海道・北陸・九州新幹線（鹿児島ルート）から半年遅れて追加され、昭和48年11月13日（1973）に整備計画が決定した。しかし国鉄財政が悪化し、新幹線建設と地方ローカル線運行の赤字、労使対立が社会問題化するなど、国鉄分割民営化まで新幹線の新規着工は見送られることとなった。

その後、昭和60年（1985）に開業時の長崎本線のルートに準じた早岐周りのルート案が公表されたものの、費用対効果の分析やJR九州が事業者となる際の採算性の問題が新たに浮上した。

平成4年11月（1992）に武雄温泉から東彼杵町方面へ短絡する新ルート案を長崎県・佐賀県の地元案として提示した。これは長崎自動車道や古代官道ルートに準じたものであった。

開業した後の採算性が問題となる中で、平成8年12月（1996）にJRが建設費用を負担する範囲を定率ではなく、新幹線が開業した後と在来線時代の利益の差による受益額の範囲に限る建設費負担の新スキームが決定し、未着工区間の着工がようやく進んだ。しかし、長崎ルートについては、新幹線ルートから外れた肥前山口～肥前鹿島～諫早駅間の第三セクター鉄道への移管に際して利害の対立する沿線自治体の慎重論が障壁となつた。その後平成19年（2007）12月、JR九州が新幹線開業後も20年は上下分離方式で営業を継続することでJR九州・佐賀県・長崎県が三者合意し、翌年3月の国土交通省の工事認可を受けて4月の着工に至ることとなつた。

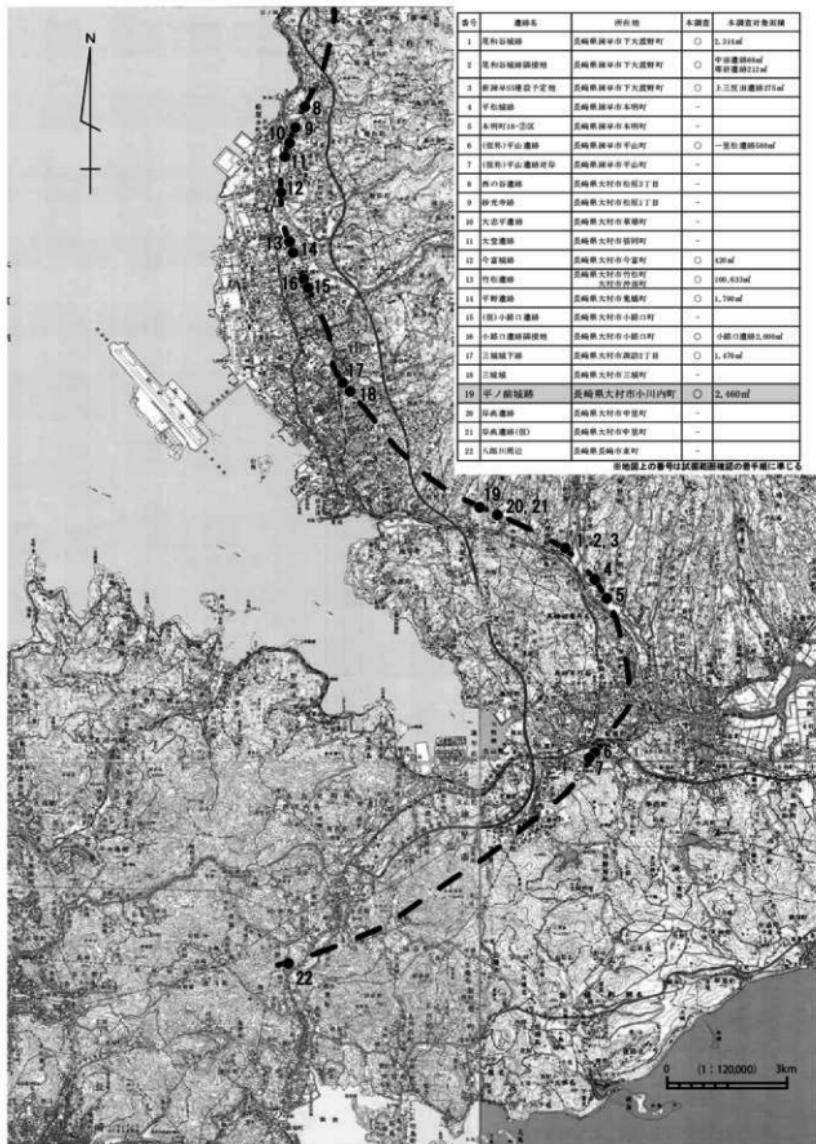
長崎駅までの区間を含む長崎県内の着工が問題となる中で、新幹線と在来線区間を直通運行できる軌間可変電車（FGT）の導入に成功したスペイン（カタランタルゴ・Alvia S120系）の事例もあり、日本国内でも軌間可変電車（FGT）の研究開発が本格化した。

しかし、「コンクリートから人へ」を唱える民主党による平成21年（2009）の政権交代により整備新幹線計画や高速道路整備計画は大きく再検討されることとなり、未着工区間の着工優先順位や費用対効果の高い方法への模索などの検討が総合的に行われることとなつた。

平成23年10月（2011）に国土交通省が設置した軌間可変技術評価委員会（鉄道技術の専門家）により、FGTの基本的な走行可能性に関する技術が確立しているとの一定の評価が下された。それを踏まえ、翌11月に整備新幹線問題検討会議において未着工区間の諫早～長崎駅間を武雄温泉～諫早駅間と一体化的な区間として標準軌によるフル規格路線として整備し、軌間可変電車（FGT）を導入するとの方針が示された。平成24年6月（2012）には、国土交通大臣が鉄道運輸機構に対して武雄温泉～長崎駅の全区間のフル規格での着工を認可した。

九州新幹線西九州ルートの工事が進展する中、平成26年10月以降にFGT台車部の高速走行時の不具合が発生した。これによりFGTの安定した営業運転の技術開発が見直されることとなり2022年度の開業に間に合わないことが明らかとなつた。平成28年3月に与党検討委員会や沿線自治体など6者は、武雄温泉駅で在来線と新幹線区間を乗り換えるリレー方式による暫定開業で合意した。

（長崎県教委編 2017『今富城跡』を加筆修正）



第2図 範囲確認調査対象地位置図 (\$=1/120,000)

2 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う発掘調査の経緯

（1）試掘調査・範囲確認調査の経緯

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の武雄温泉～諫早間の建設工事着工に先立ち、長崎県教育庁学芸文化課は、新幹線建設の主体者である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構や該当市町教育委員会文化財担当課とともに、平成 21 年 10 月 26 日から 30 日にかけ、大村市・諫早市・東彼杵町における九州新幹線西九州ルート建設工事に係る遺跡の分布調査を実施した。その結果、当該地域において、路線部・車両基地等の範囲内の 26 地点で発掘調査が必要であることが確認された。

その結果を基に担当部局と再度協議・検討を重ね、平成 22 年度の尾和谷城跡の試掘調査を皮切りに該当遺跡 22 箇所の試掘調査並びに範囲確認調査を開始した（第 2 図）。

また、平成 24 年 6 月に諫早～長崎間の追加着工が認可されたことに伴い、同区間に關しても諫早・長崎市内の新幹線路線に係る遺跡の分布調査を実施し、平成 27 年度に 3 地点の試掘調査を行った。

（2）平ノ前城跡範囲確認調査の概要

①調査の経緯

平ノ前城跡は、平成 21 年度の新幹線建設に伴う分布調査の際に新たに山城遺構が確認され、平成 22 年～23 年度にかけて長崎県教育委員会が刊行した『長崎県中近世城館跡分布調査報告書 I・II』に初めてその所在が報告されている。平成 26 年 3 月に大村市が刊行した『新編 大村市史 [第 2 卷 中世編]』には、鈴田川流域に位置する中世山城の一つとして平ノ前城跡が紹介されている。

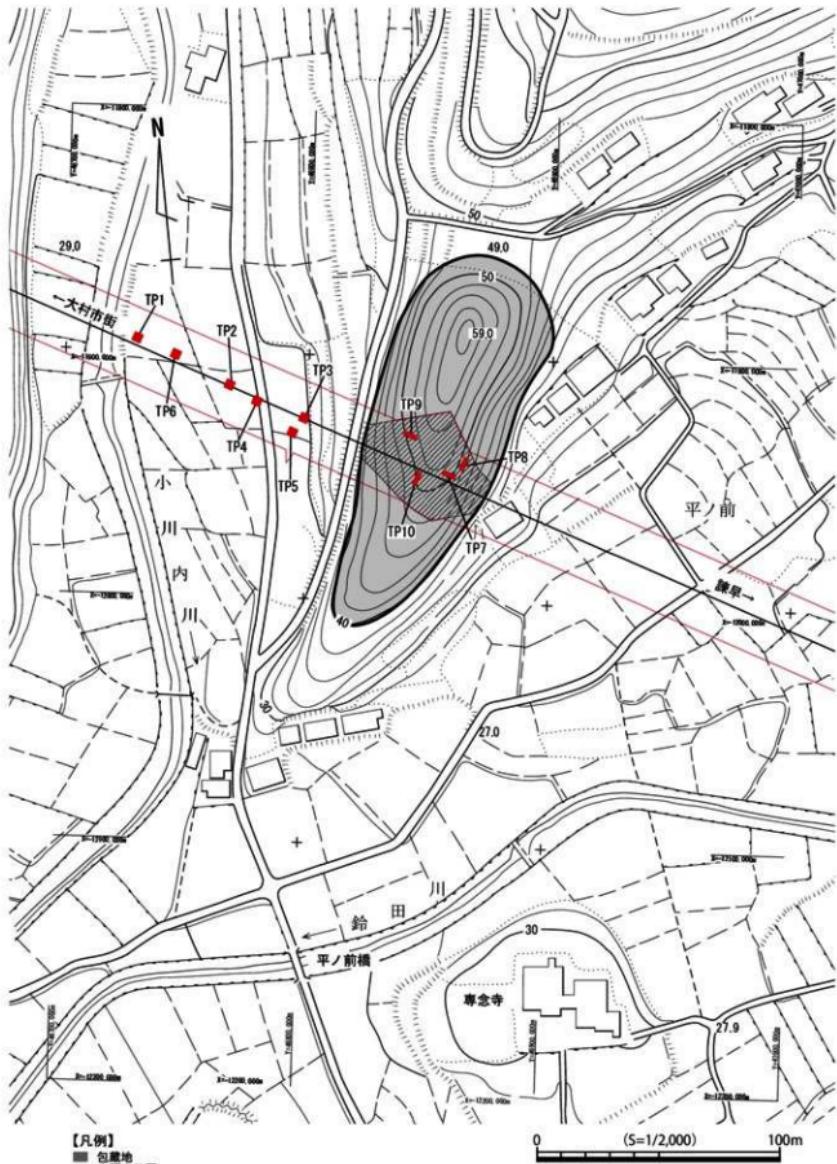
試掘調査は、平成 27 年 2 月 9 日～同年 3 月 6 日（実働 13 日）にかけて実施した。なお、この調査期間には、平ノ前城跡の東側対岸に位置する岸高遺跡の試掘調査期間も含まれている。調査は、新幹線文化財調査事務所の山梨千晶、濱村一成が担当した。

調査区は、山城の所在が確認されている丘陵部分（山林）と西側を流れる小川内川によって堆積したと考えられる低地部分（水田）に分けて設定した。調査坑は、低地部分の路線予定地内に $2 \times 2\text{m}$ の試掘調査坑を 6 カ所（TP1～TP6）、丘陵部分（山林）の路線予定地及び工事による掘削部分に $1 \times 3\text{m}$ の試掘調査坑を 4 カ所（TP7～TP10）の計 10 カ所を設定し、面積 36 m^2 の試掘調査を実施した（第 3 図）。

掘削は、表土から人力で行い、基盤層まで掘り下げたが、一部の調査坑は湧水等により基盤層まで掘削が到達できなかったものもある。

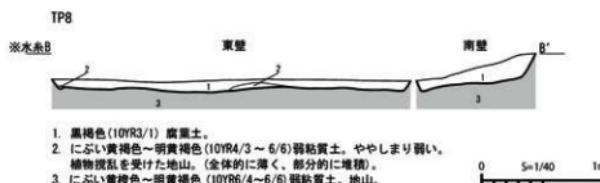
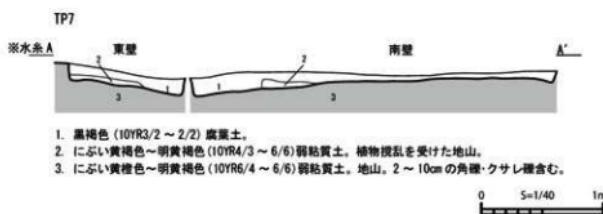
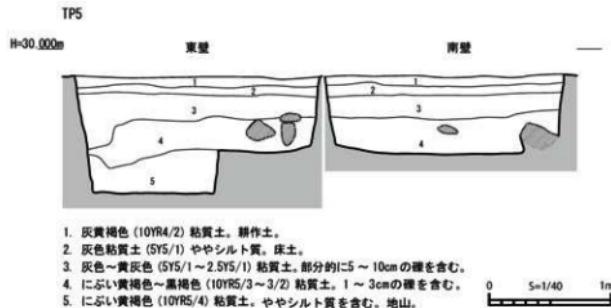
②土層（第 4 図、図版 1）

低地部分に設定した TP1 では、水田耕作土下に圃場整備前の水田（床土）、更にはそれ以前のものと思われる水田に伴う酸化鉄・マンガン沈着層を確認した。TP6 では、水田耕作土下から $40 \sim 50\text{cm}$ 大の円礫やコンクリートブロックを含む層が確認されたため、昭和 40 年代以降の圃場整備に伴う造成によって旧水田面を埋め立てた可能性が指摘される。TP2・TP4 では、現地表下 40cm ほどから湧水があったため人力掘削を中止し、重機による下層確認を行った。その結果、現耕作土と床土下部は直径 50cm 以上の礫を含む砂質土が 1m 以上堆積していることが確認され、旧河道であったことが考えられる。TP3・TP5 では、灰黄褐色の耕作土を 1 層とし、灰色のややシルト質の床土を 2 層とした。灰～黄灰色



第3図 範囲確認調査調査坑配置図 (S=1/2,000)

【例】
 ■ 包囲地
 □ 本調査範囲
 ● 試掘調査坑



※ TP7, TP8の水系 A-A', B-B'の正確な標高値は不明。ただし、調査時の測量による等高線から大凡の標高値については水系 A-A'は H=50,000m、水系 B-B'は H=48,000m に近い数値である。

第4図 範囲確認調査調査坑土層実測図 (S=1/40)



TP1 東壁土層断面（西から）



TP3 完掘状況（西から）



TP5 東壁土層断面（西から）



TP6 完掘状況（西から）



試掘調査前状況（犬走り・切岸）（南から）



試掘調査前状況（堀切・土塁）（東から）



TP7 完掘状況（西から）



TP8 完掘状況（北から）

図版1 範囲確認調査状況写真（試掘調査坑）

のシルト質土で層上部に橙色のブロックと層下部に粗砂を含む層を3層とした。にぶい黄褐色～黒褐色の粘質土には、1cm～3cmの礫・クサレ礫が混じり、まばらに人頭大の礫を包含する層を4層とした。5層はにぶい黄褐色の粘質土で、部分的にシルト質の度合いが弱く粘性がやや強くなっていることから地山となる基盤層と位置づけた。

丘陵部分（山林）に設定した試掘坑のうち、平場（曲輪部分）に2ヶ所（TP7・TP8）、土壌・堀切にあたる部分に2ヶ所（TP9・TP10）を設定した。このうち平場では、両TPとも10cmほどの黒褐色の腐葉土（1層）が堆積し、その下層に弱粘質土の植物による搅乱を受けた地山となる。最下層には、2～10cmの角礫・クサレ礫を含んだ弱粘質土層（3層）を検出した。



第5図 TP7出土遺物実測図 (S=1/1)

第1表 範囲確認調査出土遺物観察表

図版番号	器種	部位	層位	法量 (cm) ≈ () は復元	色調	胎土	生産地	備考
				口径 底径 器高	外面 内面			
第5図 染付碗	口縁部	1層	—	— (1.8cm)	灰白色	灰白色 精緻、黒色粒子	中国「漳州窯系」	染付碗C群系

③遺構・遺物（第5図、第1表）

低地部分に設けたTP1～TP6からは遺構は確認できなかった。遺物もごく少量ですべて耕作土または客土からの出土であった。丘陵部分は山城本体であり、曲輪、堀切、土壌等の山城特有の遺構が確認された。また、山城の曲輪に想定される平場TP7の腐葉土層から貿易陶磁1点が出土した。

④結果

範囲確認調査の結果、路線建設予定地となる西側の低地部分では、遺構面などは確認できず、遺物についてもごく少量であり、すべて耕作土及び客土中からの出土であったため、新幹線建設工事に支障がないと判断した。一方で丘陵部分は山城本体であり、明瞭な曲輪、堀切、切岸、土壌等の遺構が改めて確認された。また、出土遺物はごくわずかであるものの16世紀頃の中国・漳州窯系貿易陶磁が出土していることから中世山城の遺構を留めている可能性が高いため、事業者との協議・調整のうえ本調査が必要であると判断した。

II 本調査の成果

1 概要

(1) 本調査の経緯

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴い、分布調査及び範囲確認調査の結果を受けて、事業者である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構との協議を行った。

新幹線の路線建設予定範囲のうち、オープンカット工法による路線建設が予定されている山城本体となる丘陵部分については、築城当時の遺構を留めており、曲輪に想定されるTP7からも16世紀頃と考えられる漳州窯系の貿易陶磁が確認されたため、現地保存の方途を関係機関と調整を図ったが、設計変更は困難であったことから記録保存を目的とした発掘調査（本調査）を行うとの結論に至った（第3図）。その後、発掘調査費の積算、調査日数の算出、人員の確保など発掘に伴う周囲環境の調整を経て、すでに用地買収が完了した丘陵部北半分にあたる220m²を皮切りに第1次の本調査を平成28年12月7日～平成29年2月8日にかけて実施した。続いて、第2次の本調査は、平成28年度に調査を終えた220m²を除いた1,200m²を対象範囲として、平成29年5月24日～同年8月31日まで実施した。第3次となった本調査は、地権者の同意が得られた丘陵部の南半分にあたる1,040m²を対象範囲として、平成29年11月15日～平成30年1月30日にかけて調査を実施した。

なお、1次調査時に事業者の業務委託を受けた業者が、調査予定地への進入経路を誤認し、北側切岸部分において伐採樹木搬出のため重機による掘削を行った結果、包蔵地内の遺跡の一部が毀損を受けるという事態が発生した。これを受け、新幹線文化財調査事務所と独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、当該建設施工業者の関係者及び大村市教育委員会の担当部局において毀損箇所の処遇についての協議を行った。その結果、毀損箇所については、平成29年度の調査終了後に現状復旧工事を実施し、調査期間中は、作業用通路として利用することで合意した。また、毀損箇所については、写真及び図面を取るなど適切な記録処置を講じ、本書に掲載した。この際に得られた土層堆積の情報は、調査時の曲輪や切岸の構造を検討するうえで、大いに参考となった。

(2) 調査の方法（第6図）

調査範囲は、南北に伸びる丘陵上の2,460m²を調査区として設定した。調査区グリッドは、世界測地系座標に基づいた座標を元に20m×20mの方眼を設定し、グリッド北西隅の座標のX・Yの百の位、十の位の数字を組み合わせて、4桁のグリッド番号を付した。さらにそれを四分割して北西方向から時計回りに任意のa～dの記号を付与した（例 9084d、9284cなど）。第1次及び第2次調査では、調査地を地形に即して長軸方向と短軸方向に直交するように四分割し、北西から順に1～4区の区画を設定した。第3次調査では、堀切より更に南側に位置する区画を基点として南西方向に向かって時計回りに1区～7区までを設定し、遺構・遺物・土層の記録及び確認の際に併記した。

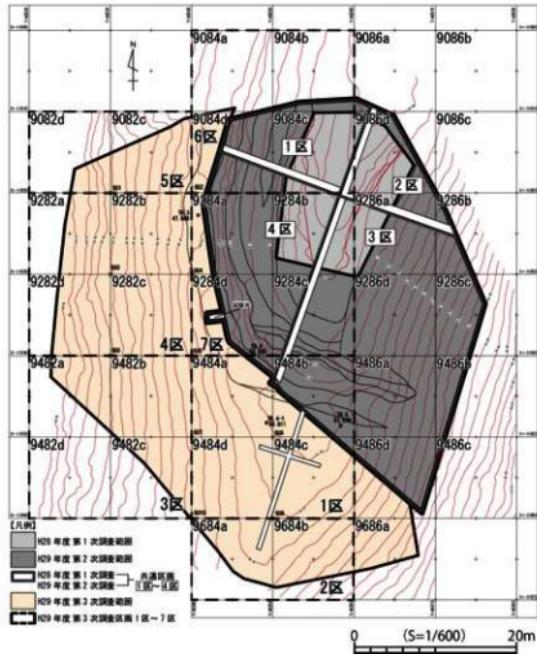
掘削手段については、範囲確認調査の際に、表土直下は地山であることが確認されていたため、表土掘削から包含層掘削、遺構検出まで全て人力掘削にて行った。第2次・第3次調査では、東側斜面と西側斜面も調査範囲であったことから排土運搬用のモノレールを採用し、適宜土嚢袋につめて調査地からの搬出作業を行った。また、搬出した土嚢については、軽トラックにて所定の排土置場に集積

した後、さらに4tダンプ車にて指定された集積場に搬出した。

このほか、斜面での掘削作業においては、傾斜角が40度未満であっても作業員の安全性を考慮して、高所作業における事前講習の実施、落石防止対策、ロープ及び専用のハーネス着用など調査の安全管理対策に留意した（図版2）。検出遺構については、土層断面の観察と実測による作図、リバーサル・モノクロフィルムカメラとデジタルカメラを必要に応じて使用し、写真撮影を行った。出土遺物の取り扱いに関しては、遺構に伴うものや出土地点が明確なものは、出土状況の写真撮影とトータルステーションを用いて記録した。それ以外の遺物については、グリッド番号、層位、日付などを付与して一括にて取り上げを行った。

(3) 整理作業の概要

各調査終了後、速やかに遺物の洗浄を行い、遺物IDの付与やナンバリング作業、遺物の接合、各種台帳作成と合わせて遺構図及び土層図のデジタルトレース作業を行った。平成30年4月から5月にかけて土器実測、6月から石製品と金属製品の実測作業及び報告掲載用の遺物写真の撮影を行った。同年、7月より遺物実測のトレース作業と原稿執筆、全体のとりまとめを行った。



第6図 調査区グリッド配置図 (S=1/600)

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境（第7図）

平ノ前城跡が所在する大村市は、長崎県のほぼ中央に位置し、東には多良岳・五家原岳・経ヶ岳といった標高1,000m級の多良山系がそびえて佐賀県と接し、西には大村湾が広がる。この多良山系を源として、大村湾に注ぐ市内最大の2級河川である郡川や鈴田川がある。また、多良山系の山麓には堆積作用による火山麓扇状地が発達し、大村市南部から諫早市西部では、諫早市上大渡野町広谷を扇頂として大村市荒平町・玖島・岩松町・小川内町まで広がる緩やかな台地を形成している。

平ノ前城跡は、多良山系から火山麓扇状地を開析して南流する鈴田川左岸の平町に位置し、南部に張り出す標高約50mの低丘陵上の先端部に立地する。遺跡の東側には鈴田川の谷底平野が広がり、耕作地として利用されている。さらに南側のやや小高い丘には、正保元年（1644）に当時の大村藩主大村純信が創建したと伝わる淨土宗高丘山一心院専念寺があり、これを一望できる位置にある。西側は小川内川の侵食によって形成された開析谷となり、低地部では宅地化が進んでいる。現在、遺跡包蔵地周辺は、杉林・雜木林・ミカン畑として利用されている。

(2) 歴史的環境（第8図、第2表）

大村市と諫早市の市境付近に立地する平ノ前城跡周辺には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が多く点在している。特に昭和45年に長崎県教育委員会が実施した分布調査によって発見された風観岳支石墓群は、標高236mの風観岳（日野見嶽）を頂部として丘陵傾斜面と鞍部に分布する支石墓群を主体とする縄文時代晚期から弥生時代早期にかけての遺跡である。また、箱式石棺墓周辺部からは、朱を塗布した夜臼式期の小型壺片（供獻土器）や刻目突帯文土器、石鏟、扁平打製石斧などが出土している。

中世頃の遺跡としては、現在の大村市と諫早に抜ける主要幹線道路である国道34号線沿いに複数の中世山城の分布が確認されている。大村市域側の山城としては、平ノ前城跡の東側の丘陵上に位置する岸高城跡と鈴田峠に隣接する伊勢山城跡があり、南部の三浦半島周辺部には、城山城跡・塔之峰城跡・伊賀峰城跡が点在する。また、2010年に刊行された『長崎県中近世城館跡分布調査報告書I 地表名・分布地図編』によると鈴田川下流域周辺には、西光寺山城跡・白鳥城跡・岩松城跡も報告されている。これらの山城の一部については、江戸時代に大村藩が編纂した詳細な農村の悉皆調査記録である『郷村記』に堀切などの記述が残っており、当時の縄張りの状況を現在に伝える貴重な文献資料となっているが、平ノ前城跡については記載がなく不明である。

諫早市域側の山城としては、本明川流域にいくつかの山城が確認されている。その一つである尾和谷城跡は、戦国時代に諫早を領した西郷氏の配下であった尾和谷軍兵衛が大村氏との境目の城として築城したと伝わる城跡である。諫早市による発掘調査では、建物遺構を中心に青磁・染付などの貿易陶磁、土師器、石塔などが出土している。同じく西郷氏の支城として考えられている平松城跡は、本明町の丘陵上に位置し、土壘、堅堀、空堀、堀切、石積遺構といった築城当時の縄張りを留めており、曲輪部分からは明染付、国産陶器甕などが出土している。この平松城跡と対面する破籠井町には宮園城跡があり、空堀、土壘、帶曲輪の遺構が残っている。

諫早市の西部に位置し、今村川と真崎川の川筋に挟まれた山頂（城山）に真崎城跡があり、西郷氏

の家臣である志々伎四郎左衛門が居城していたと伝わる。隣接する志々岐神社の境内からは、宝篋印塔の礎石が発見され、「寛正 2 年（1461）」の紀年銘がある。真崎城跡の山城遺構としては、空堀や土塁、堀切、石積みなどが良好に残っている。この真崎城跡の北東には、大村氏側が築城したと伝わる伊賀峰城跡が対峙していることからも、大村と諫早の領境周辺では、戦国期の大村氏と西郷氏の軍事的な緊張関係が中世山城の分布状況から読み取れる。

平ノ前城跡の東側斜面崖下には小さな洞があり、その周辺には中世石塔の一部が埋没している。紀年銘がわかるもので最も古いものは、「応永 25 年（1418）」の石塔である。それ以外で銘が判読できる石塔としては「故道口禪門」「預修妙意禪尼」などがある（図版 14-②）。また、専念寺境内には溶結凝灰岩製の相輪残欠が確認されており（図版 14-④）、その建塔年代は 14 世紀代半ばから後半頃のものと考えられている。この 14 世紀半ばから後半頃にかけては、大村市北部の郡川周辺に栄えた「郡七山十坊」と称される大規模な寺院群に大きな変動があったとされる時代で、密教系寺院から禪宗系寺院への転換期にある。

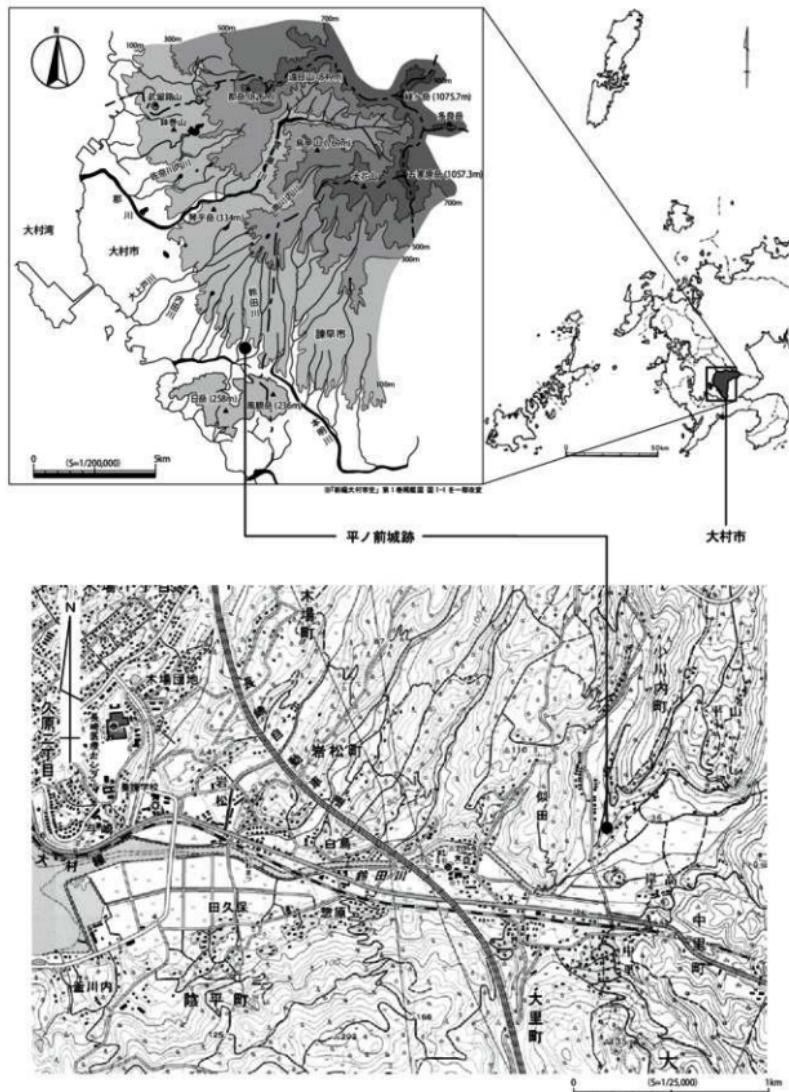
さらに同時期には大上戸河畔にも中世寺院群が密集しており、大般若經 600 卷の写経事業が行われている。しかし、郡川周辺や大上戸河畔にあった中世寺院と鈴田川上流域に位置する寺院とのような関係性を持っていたかは不明のままである。そこで重要な手がかりとなるのが、郷村記の鈴田村にあった「古寺跡之事」にわずかに伝承が残る「幸久寺」との関連性である。幸久寺は、専念寺の裏にあったとされるが、どのような寺院であったかは不明である。少なくとも郷村記に記された江戸時代後期にはすでに廃寺となり、田地化していたことがわかる（第 33 図）。

第 2 次調査では、明時代の染付（青花）を中心とする貿易陶磁が出土したほか、東側斜面上部から緑泥片岩製の宝篋印塔相輪部が出土している（図版 10）。それとは別に遺跡包藏地の最南端（調査区外）からは、同じく緑泥片岩製で宝篋印塔のものと考えられる台座部分に「享禄 2 年（1529）」の紀年銘が確認されている（図版 14-①）。平ノ前城跡の曲輪周辺から出土した遺物年代が 16 世紀頃であり、紀年銘資料と考古学資料の年代は概ね符合する結果が得られている。また、紀年銘入石塔の中央には『當山星巖昌公現存』の刻銘があり、「星巖昌公」という戒名を持つ人物が幸久寺または平ノ前城と何らかの関係があったと推測される。この「星巖昌公」と同一人物として考えられる紀年銘が、尾和谷城跡の包藏地内（諫早市下大渡野町開地区）に伝わる佐賀型六地蔵（石幢）にあり、竿部には「星巖享禄壬辰（1532）」の紀年銘が確認されている（図版 14-⑧）。

2 つの石塔の紀年銘はいずれも享禄年間であり、生前の追善供養または逆修のために建塔した可能性が高い。平ノ前城跡周辺には中世石塔である宝篋印塔や五輪塔などが多数遺存しており、緑泥片岩製も幾分含まれていることから、当時の大村氏の勢力範囲や西郷氏との軍事的緊張関係を考察するうえで、平ノ前城跡の発掘調査は重要な示唆を与えるきっかけになったことは確かである。

【引用・参考文献】

- 長崎県立長崎図書館資料刊行部 1960 『大村藩郷村記（第七巻）』
諫早市教育委員会 2004 『尾和谷城跡』諫早市文化財調査報告書 第 16 集
諫早市教育委員会 2006 『風説岳支石墓群発掘調査報告書』諫早市文化財調査報告書 第 19 集
長崎県教育委員会 2010 『長崎県中近世城跡分布調査報告書 I 地表名・分布地図編』長崎県文化財調査報告書 第 206 集
大村市史編さん委員会 2014 『新編大村市史 第二巻（中世編）』



第7図 遺跡位置図



第8図 周辺遺跡分布図 (S=1/40,000)

『長崎県遺跡地図平成6年版』「大村」「諫早」、『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅰ』「大村」「諫早」を基に作成

第2表 周辺遺跡一覧表

遺跡名	種別	立地	時代	遺跡名	種別	立地	時代
大村館	館跡	平野	戦国時代	西光寺山城	山城	丘陵	中世?
杭出津	遺物包含地	平野	縄文	平ノ前城	山城	丘陵	中世
宝生寺	寺跡	平野	中世	岸高城	山城	丘陵先端	中世?
三城城	平山城	丘陵	中世 永祿7年	岸高	遺物包含地	台地	旧石器・縄文
琴平神社古墳	古墳	丘陵	古墳	伊勢山城	城跡	丘陵岸	中世?
上水計	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文	上三反田	遺跡包含地	冲積地	旧石器・縄文・近世
小佐古石棺墓C地点	墳墓	丘陵	古墳	尾和谷城	山城	丘陵	中世 室町時代末期～元龜・天文
小佐古	墳墓	丘陵	古墳	中田	遺跡包含地	冲積地	弥生・古墳
武部	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文	專岩	遺物包含地	冲積地	弥生・古墳
小佐古B	墳墓	丘陵	古墳	中下	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文
桜B	遺物包含地	丘陵	縄文	田尻	遺物包含地	岬	旧石器・縄文
足形	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文	萬川内	墳墓	丘陵	中・近世
桜A	遺物包含地	台地	旧石器・縄文	城間ノ辻	遺物包含地	台地	旧石器・縄文
鷹石	遺物包含地	丘陵	縄文	横野	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文
八幡神社	墳墓	平野	古墳	山中	墳墓	丘陵	中世
川内郷鬼塚	墳墓	丘陵	古墳	風駆岳支石墓群	墳墓	丘陵	縄文・弥生
上長尾	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文	風駆岳	墳墓	丘陵	縄文・弥生
清水B	遺物包含地	台地	旧石器・縄文	宮園城	山城	丘陵	中世
三ツ石	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文	平松城	山城	丘陵	中世 南北朝期か文明年間
玖島城	平山城	平野	近世 康長4年	半崎山城	山城、砦	半島・岬	中世?
五教館御成門	館跡	平野	近世	鹿越	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文
玖島	遺物包含地	平野	旧石器・縄文	梶原	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文
久原城	平山城	丘陵	平安末期か? 戦国期(推定)	神上 ^{ナカミ}	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文
日向平	遺物包含地	平野	不明	城山城	山城	丘陵先端	中世
外浦小路	遺物包含地	平野	旧石器・縄文	中嶋	遺物包含地	台地	中世
東山	遺物包含地	平野	旧石器・縄文	善福寺	遺物包含地	平野	旧石器・縄文
東浦貝塚	貝塚	平野	縄文	多々良川A	遺物包含地	台地	縄文
下久原	遺物包含地	平野	旧石器・縄文	多々良川B	遺物包含地	台地	旧石器・縄文
上久原	遺物包含地	平野	旧石器・縄文	蓮藏寺	遺物包含地	台地	旧石器・縄文
木場砦	砦跡?	丘陵	中世?	下峰原高場	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文
木場B	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文	下峰原	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文
木場A	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文	上峰原	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文・近世
石原	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文	伊賀峰城	山城	山頂	中世 戦国初期
ワラビノ才	遺物包含地	丘陵	不明	迫ノ山	遺物包含地	台地	旧石器・縄生
大石原	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文	溝陸	遺物包含地	丘陵	旧石器・縄文
西出口	遺物包含地	丘陵	縄文	真崎城	山城	丘陵	中世 戦国初期
岩松城	山城	台地・段丘	中世 戦国初期	真崎西	遺物包含地	丘陵	旧石器
土井の浦古窯	古窯	丘陵	近世	貝津横島B	遺物包含地	丘陵	縄文
塔之峰城	山城	丘陵・尾根	中世	西佐竹	遺物包含地	丘陵	縄文
白鳥城	山城	丘陵先端	中世?				

『長崎県遺跡地図平成6年度版』「大村」「諫早」、『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅰ』「大村」「諫早」を基に作成

3 調査組織

本調査は長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が担当し、作業員の労務管理および地形測量・遺構実測を株式会社島田組、株式会社プロレリックに委託した。各年度の調査組織は以下のとおりである。

[平成 26 年度 /HNM201428]

範囲確認調査担当 文化財保護主事 山梨 千晶 ※現 長崎県埋蔵文化財センター
文化財保護主事 濱村 一成 ※現 長崎県教育庁学芸文化課

[平成 28 年度 /HNM201611]

新幹線文化財調査事務所 所長 古門 雅高
課長 杉原 敦史、小島 克孝
係長 中尾 篤志
主事 水口 真理子
本調査担当 主任文化財保護主事 白石 溪昇 ※現 熊本市教育委員会災害派遣
文化財調査員 堀内 和宏 ※現 青森県つがる市教育委員会
株式会社島田組 現場代理人 三浦 清文
調査員 安川 賢太

[平成 29 年度 /HNM201703]

新幹線文化財調査事務所 所長 古門 雅高
課長 杉原 敦史、小島 克孝
係長 中尾 篤志
主事 水口 真理子
本調査担当 係長 中尾 篤志
文化財調査員 一瀬 勇士
株式会社プロレリック 現場代理人 山本 勝也
調査員 村上 孝司

[平成 29 年度 /HNM201711]

新幹線文化財調査事務所 所長 古門 雅高
課長 杉原 敦史、小島 克孝
係長 中尾 篤志
主事 水口 真理子
本調査担当 文化財調査員 村川 逸朗、一瀬 勇士
株式会社島田組 現場代理人 林 那智
調査員 三ツ股 正明
整理・報告書作業担当 文化財調査員 一瀬 勇士、山崎 因

4 日誌抄録（本調査）

（1）平成 28 年度 第 1 次調査 [HNM201611]

- ・平成 28 年 12 月 7 日：準備工開始。
- ・平成 28 年 12 月 28 日：調査前の空中写真撮影。
- ・平成 29 年 1 月 5 日：開所式。1 区表土剥ぎ開始。染付の磁器片出土。
- ・平成 29 年 1 月 6 日：調査グリット及び南北に横切る十字の土層観察用ベルトの設定。
- ・平成 29 年 1 月 11 日：2 区・3 区の表土剥ぎ開始。2 区調査区内に石列（SW）を確認。
- ・平成 29 年 1 月 13 日：3 区盛土の流失した堆積の有無を確認するためのサブトレーナーを設定、掘削。
地山上に流れ込みの土があることを確認。
大村市教育委員会の大野氏が調査指導のため来訪。
- ・平成 29 年 1 月 16 日：4 区表土剥ぎ開始。白磁片と染付の小片出土。
- ・平成 29 年 1 月 19 日：3 区流土検出状況記録撮影。大村城南高校教諭の林氏が調査指導のため来訪。
- ・平成 29 年 1 月 24 日：2 区・3 区を拡張、掘削。土師器片と染付 2 点出土。
- ・平成 29 年 1 月 30 日：1 区遺構検出作業開始（南北ベルトの北半掘削完了）。
- ・平成 29 年 1 月 31 日：4 区遺構検出作業開始（南北ベルトの南半と東西ベルトの西半掘削完了）。
- ・平成 29 年 2 月 1 日：南北十字ベルトの除去作業。空中写真撮影。
- ・平成 29 年 2 月 3 日：調査区完掘後、記録撮影。撤収作業開始。
- ・平成 29 年 2 月 8 日：成果品検査。調査終了。

（2）平成 29 年度 第 2 次調査 [HNM201703]

- ・平成 29 年 5 月 24 日：準備工開始。
- ・平成 29 年 6 月 5 日：調査区周辺の雑木林伐採作業開始
- ・平成 29 年 6 月 12 日：調査前空中写真撮影。
- ・平成 29 年 6 月 15 日：運搬用モノレール設置。調査前測量完了。
- ・平成 29 年 6 月 19 日：作業員雇用開始。新規入場者教育実施。
- ・平成 29 年 6 月 23 日：高所作業に伴う転落防止柵の設置作業完了。調査開始。1 区曲輪 3 の 2 層黄褐色土から漳州窯系染付皿出土。
- ・平成 29 年 7 月 3 日：曲輪 3 床面検出。白磁片 1 点出土。曲輪 4 表土剥ぎ開始。
- ・平成 29 年 7 月 11 日：1 区掘削完了。2 区・3 区東側傾斜面表土剥ぎ開始。2 区から綠泥片岩質の宝鏡印塔相輪部が出土。
- ・平成 29 年 7 月 18 日：4 区曲輪 4 検出作業完了後、土壙の検出作業開始。曲輪 5 の検出作業にて上端に石積みを確認。
- ・平成 29 年 7 月 24 日：3 区堀切検出作業。1 区曲輪 5 石積みの実測作業開始。
- ・平成 29 年 8 月 3 日：3 区東西ベルト東側南壁土層写真撮影後、実測開始。
- ・平成 29 年 8 月 7 日：3 区南北ベルト東壁土層（堀切～土壙）写真撮影後、実測開始。
- ・平成 29 年 8 月 9 日：曲輪、石積み検出状況写真撮影。空中写真撮影。
- ・平成 29 年 8 月 17 日：トレーナー 6箇所を設定し、曲輪、土壙、石積みの断ち割り調査開始。

- ・平成 29 年 8 月 17 日 : 4 区曲輪 4 の地点から銭貨がまとまって出土したためサブトレンチを設定し、掘削。土層の観察で構造は確認されなかった。
- ・平成 29 年 8 月 28 日 : 3 区土壌の下層確認のため重機による掘削。排土運搬・土壌解体作業を継続して行う。調査区内の掘削ほぼ完了。
- ・平成 29 年 8 月 31 日 : 土量検査・成果品検査実施。調査終了。

(3) 平成 29 年度 第 3 次調査 [HNM201711]

- ・平成 29 年 11 月 15 日 : 準備工開始。
- ・平成 29 年 11 月 29 日 : ロープ高所作業安全講習会実施。ヤード・仮設トイレの設置工事。
- ・平成 29 年 12 月 1 日 : 調査前空中写真撮影。運搬用モノレール設置完了。
- ・平成 29 年 12 月 4 日 : 1 区・2 区の表土剥ぎ開始。
- ・平成 29 年 12 月 6 日 : 1 区・2 区に跨る南北十字ベルトの設定。6 区・7 区に連なる切岸の落石対策として防護ネットとコンバネの設置作業。
- ・平成 29 年 12 月 8 日 : 1 区北側ベルト東壁と 2 区東南にトレンチを設定し、掘削。
- ・平成 29 年 12 月 11 日 : 2 区表土剥ぎ、陶器片 1 点出土。
- ・平成 29 年 12 月 14 日 : 1 区・2 区掘削完了後、記録撮影。4 区・5 区表土剥ぎ開始。
- ・平成 30 年 1 月 19 日 : 4 区・5 区犬走り掘削完了後、測量及び記録撮影。
- ・平成 30 年 1 月 20 日 : 空中写真撮影。5 区掘削土搬出後、土壌解体作業。人力掘削終了。
- ・平成 30 年 1 月 22 日 : 重機による北側盛土復旧工事開始。運搬用モノレールの撤去作業。
- ・平成 30 年 1 月 26 日 : 土量検査実施。
- ・平成 30 年 1 月 30 日 : 成果品検査実施。調査終了。



1 区・4 区 曲輪 4 掘削状況(南から)



東側斜面高所ロープ作業状況(南から)



切岸造構掘削状況(西から)



B トレンチ掘削状況(西から)



西側斜面高所ロープ作業状況(北から)



犬走り平坦部掘削状況(北から)

図版 2 調査状況写真

5 基本土層（第9図～第12図）

第1次調査から第3次調査までの共通土層としては、概ね1層から4層までの分層を設け、各トレーナーや土層観察ベルトをもとに平ノ前城跡の基本土層について記述する。

調査区周辺の地質環境は、事前のボーリング調査の結果から砂岩岩盤層を基盤層としていることがわかつており、これを4層として位置づけた。地点によっては風化した砂岩礫層が露頭する箇所も認められる。特に西側から南西方向に伸びる切岸遺構の土台部分には、この風化した砂岩岩盤層の露頭が顕著にみられる。従って切岸遺構は、曲輪の上端部分を切り土により法面化し、地山となる砂岩岩盤層の上に2段～3段の人工的な石積みを配した比較的簡易な造りであったと考えられる。石積みの背後に明確な裏込めの所在は確認できなかったが、しまりの弱い風化土壤で充填し、石積みの強度を補強していたと思われる（図版3）。

4層上面に堆積し、土壤化した黄褐色の砂質土を3層とした。3層には、拳大の角礫や砂質土を包含しており、3層上面から遺物が出土していることから3層上面が遺構面と考えられる。

2層は、3層の2次堆積層と考えられ、明黄褐色の砂質土で、3層に比べしまりは弱い。出土した遺物の多くが、この2層（遺物包含層）から出土しており、出土遺物の年代は概ね16世紀頃のものである。また、地点によって2層は、砂礫や角礫を含む層が確認されており、曲輪や土壘造成時に伴って形成された流入土と思われる。この傾向は、土壘付近に顕著に現れていることから、堀切と堅堀の造成時に4層である砂岩岩盤層まで掘削し、この際に出た掘削土を土壘用の盛土として転用していたことが考えられる（図版3）。なお、1層は黒褐色の腐葉土層で、樹根を多く含んでいる。



北側通路部東壁石積部分土層観察（西から）



東西ベルトサブレンチ東半土層観察（南西から）

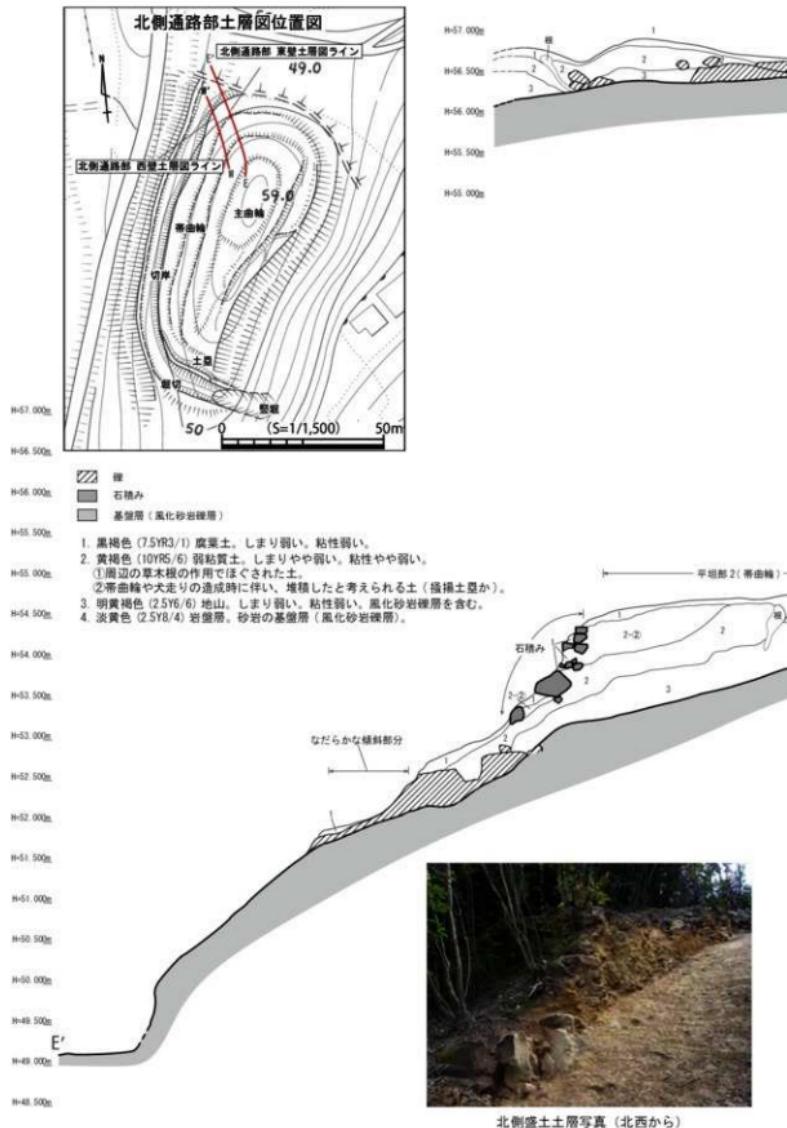


曲輪5 のり面上端石積み断面・トレンチ2（北から）



土壘断面・トレンチ3（南西から）

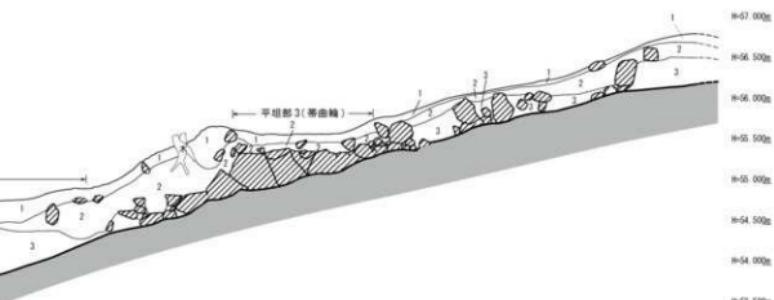
図版3 土層写真



第9図 北側通路部東



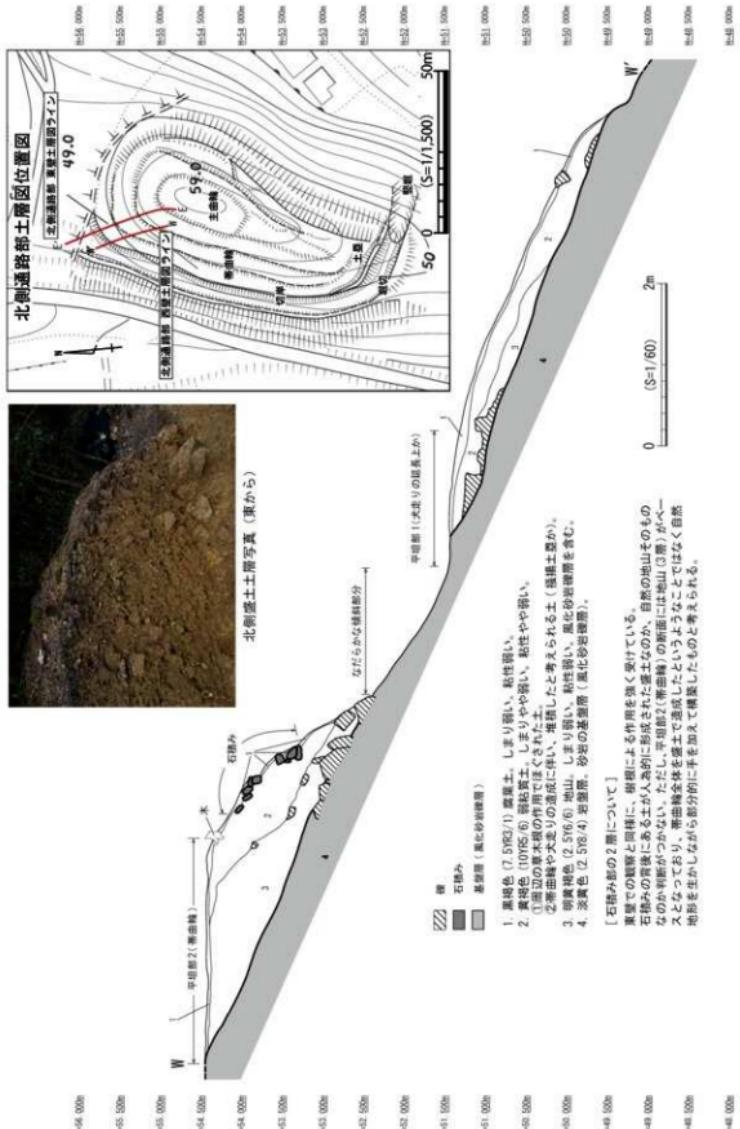
北側頂上部土層写真（西から）



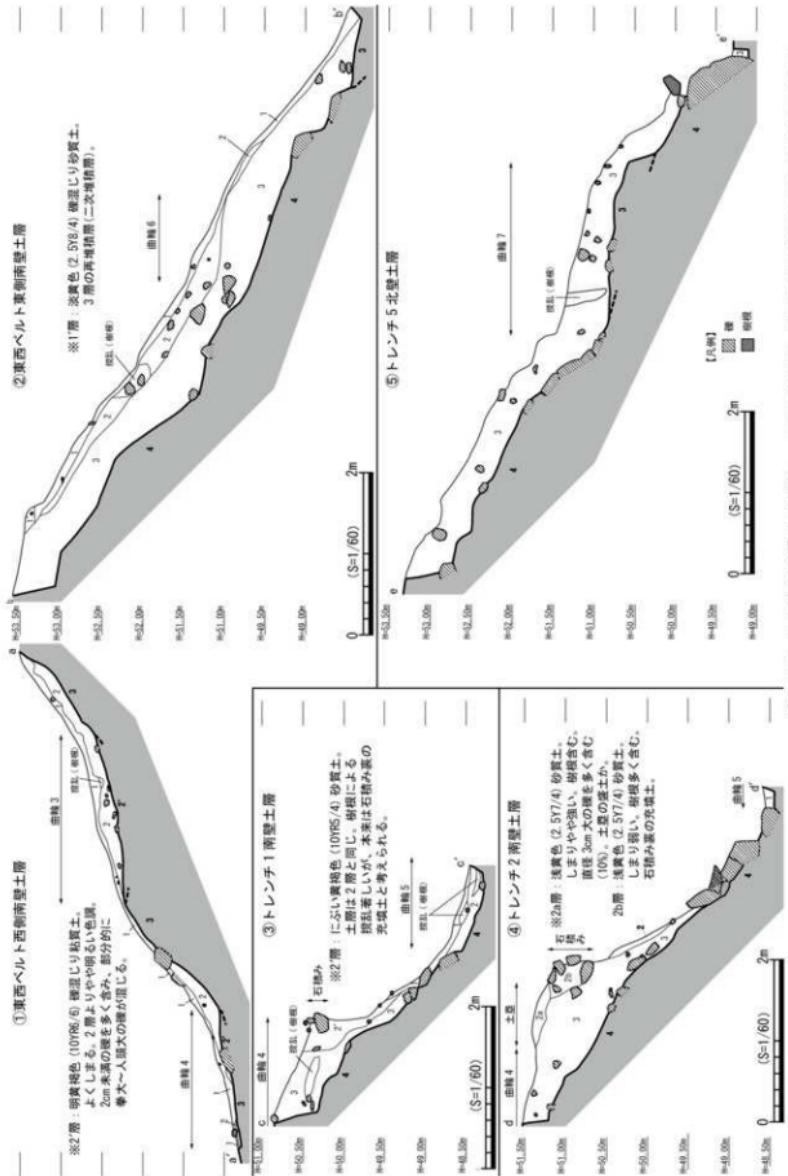
北側平坦部3(帯曲輪) 土層写真（西から）

0 (S=1/60) 2m

壁土層実測図 (S=1/60)



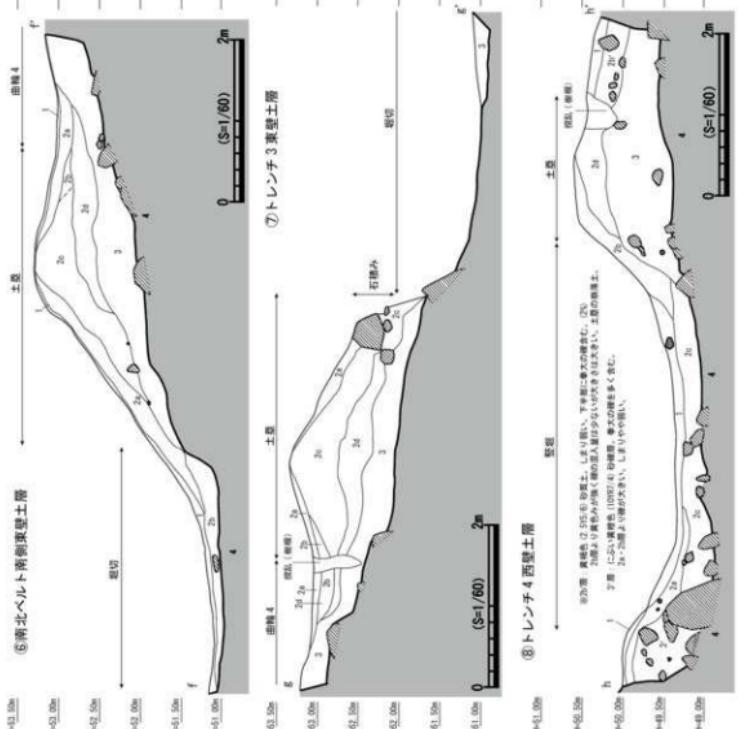
第10図 北側道路部西壁土壤実測図 (S=1/160)



第11図 土層実測図①(S=1/60)
※「土層位置図」及び「井戸土層注記」は次頁の第12図に記載。
※曲線の番号は26頁第13図参照。

【共通土質記】

- 1 層： 黒褐色 (10YR3/1) 鹿鳴土。 しまり弱い、 粘性なし。
 根根多く含 C。
 2 層： 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土。 しまり弱い、 厚径 1cm ～ 奉太の根
 を含む (20%)。 3 層の二次堆積帶で黄色色含金。
- 3 層： 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土。 しまり弱い、 奉太の根含 C (15%)。
 4 層が風化して土壌化した層。 この上層が洗層。
- 4 層： 淡褐色 (2.5YR4/4) 砂質土。 砂岩の基盤層。 地点によってはこの
 上面が強烈側となる。



第12図 土層実測図(2)(S=1/60)

土層調査図

※曲輪の番号は 26 頁第 13 図参照。

6 遺構と遺物

第1次調査では、尾根の頂上部を中心に平坦部となる曲輪（KW）と曲輪に付随する石積遺構（SW）を調査地の北東側に位置する2区から検出した。

第2次調査では、いずれも幅の狭い帯曲輪5面（曲輪3～曲輪7）、南側の尾根筋を断ち切るように造成された堀切1条、竪堀1条、土塁1条を検出した（第13図）。また、曲輪4と曲輪5の間には切岸遺構があり、法面上端に2から3段の砂岩角礫を乱雑に積んだ石積みを確認した（第11図③④）。

（1）石積遺構（SW）

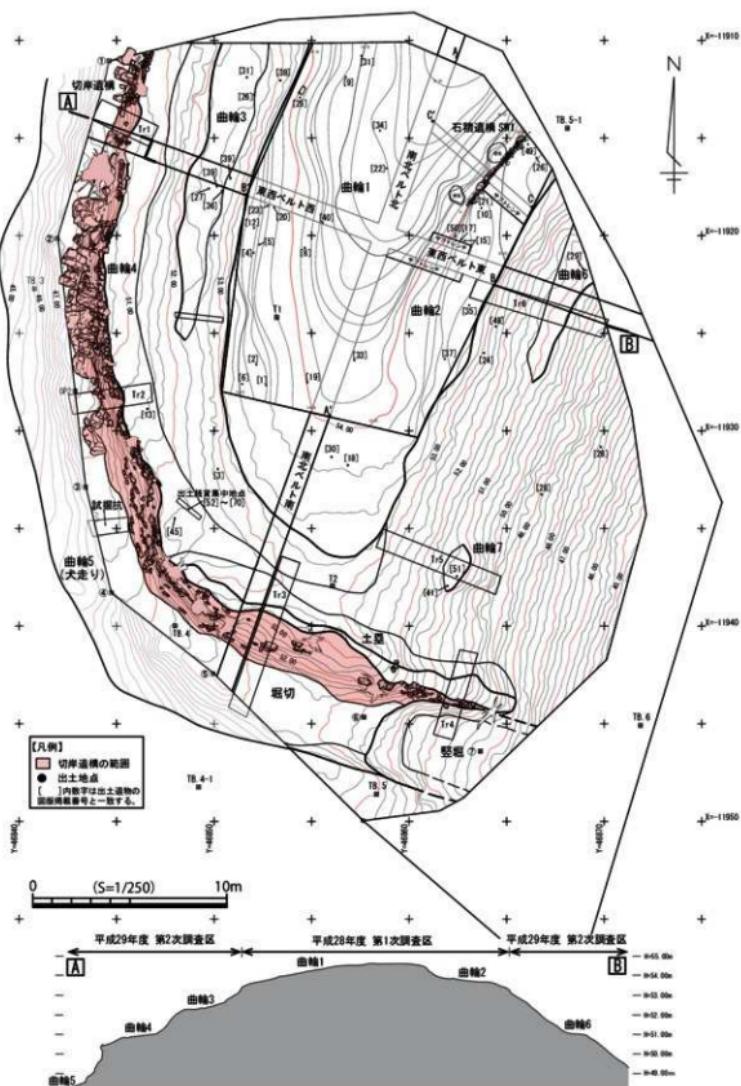
調査地の北東側（2区9086d）において築城当時の曲輪の石積みと考えられる遺構（SW1）を検出した（第14図、図版4）。検出した遺構は長さ4.6m、幅0.4m、残存高0.5mであった。この石積遺構は、人頭大からそれよりやや大きい礫を1段から2段程度積み上げており、石積みに使用されている礫は、すべて風化砂岩礫である。

第14図は、東西トレントの土層図である。石積み周辺の土層観察によると頂上部付近に造成されたと考えられる曲輪から東西方向はいずれも緩傾斜となり、流れ込みによって地山の風化土が堆積したと思われる層が見られた（第2層）。この層からは、16世紀代の染付碗や皿が出土しており、いずれも中国産の貿易陶磁である。また、2区から出土した遺物の多くが、石積遺構よりもやや東側から出土する傾向にあった。2区から3区にかけての層では、風化礫をあまり含んでおらず、ややしまりの弱い土の広がりが平面的に認められたため（図版4）、図のように石積遺構に直交するトレントを設定し（第14図）、層位の堆積状況を確認した。その結果、第4層と第5層が地山であることを確認し、第4層及び第5層を掘削した後に、風化砂岩礫の石積みを人為的に積み上げた可能性が高いことがわかった。これらの状況から検出した石積遺構の造成については、次のような指摘ができる。

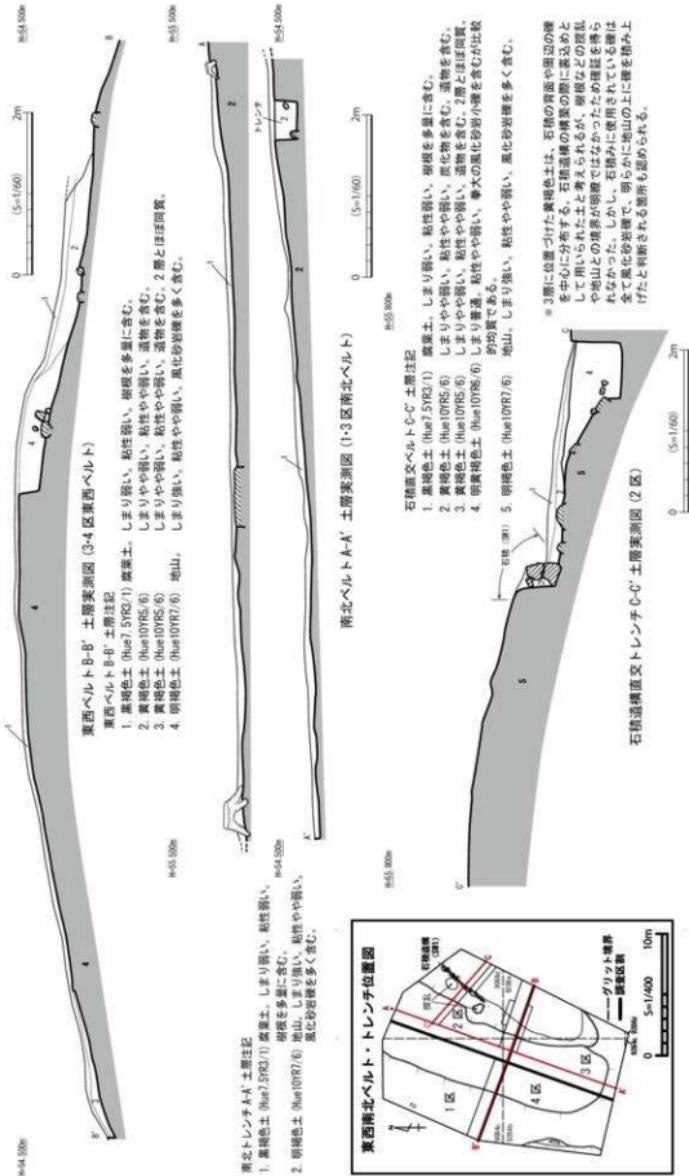
- ①平ノ前城築城以前には、砂岩礫を多く含む第5層及び風化土を伴う第4層が堆積していたが、曲輪の造成に伴い東西方向に緩傾斜地のカットを行った。
- ②曲輪造成の際、第4層及び第5層から風化砂岩礫が多く出てきたため、それらを再利用して簡易的な石積みを施した。
- ③その後、上方から遺物を包含する土が流れ込み（2層～3層）、表土上に腐葉土（1層）が堆積し、現在に至る。

石積み自体は簡易的な積み上げによるため、脆弱で強度はそれほどなかったと考えられる。その理由としては、石積みの背後に明確な裏込めを確認できなかった点があげられる。検出状況（図版4）からわかるように石積みの一部は、すでに崩落しているものもあり、北側寄りの石積みの残存状況はあまり良くなかった。また、樹根などの作用や雨風による長年の風化により、地山との境界が明瞭ではなく、裏込めと認められる情報は得られなかった。同様に西側に残存する切岸遺構も土層の断ち割りからは明確な版築技法や裏込めは確認できず、未加工の石積みを乱雑に用いていることからあまり手をかけずに構築した可能性が高い。

従つて、平ノ前城跡が尾根筋の自然地形を上手く利用しながら築城した一方で、全体的な縄張りの造成は甘く、急拵えで整えた感は否めない。このことは大村領と諫早領の領境に位置する平ノ前城跡が何らかの軍事防衛上の緊急性を持って築城されたことを裏付けるものではないだろうか。



第13図 遺構配置図 (S=1/250)



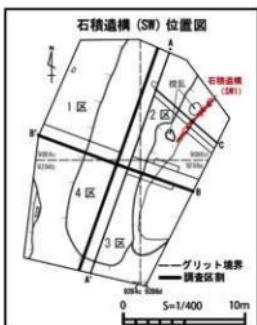
第14図 第1次調査東西南北ベルト・トレーンチ土層実測図 (S=1/60)



石積遺構 (SW) 平面図 ($S=1/40$)



石積遺構 (SW1) 立面図 ($S=1/40$)



石積遺構完掘状況（北から）



石積遺構近景（北東から）



直交サブトレーンチ土層観察（南から）



SW1付近の遺物出土状況（東から）



南北ベルト北半土層観察（北東から）



南北ベルト南半土層観察（南東から）



東西ベルト西半土層観察（南東から）

図版4 石積遺構実測図・東西南北ベルト土層写真

(2) 切岸造構（第11図③④、第15図～第21図）

曲輪4（帶曲輪）と曲輪5（犬走り）を南西方向に向かって仕切る堀線上に切岸が構築されている。切岸の高さは低いところで2m、高いところで3mほどの高低差がみられる。上端の2段～3段に人工的に積んだと考えられる石積みが鉢巻状に巡っており、南の尾根筋を断ち切る土壘と堀切に接続している。

石積みに使用された石材は、いずれも未加工の風化砂岩礫を乱雜に積んだもので、曲輪5（犬走り）の造成時などに出た4層～5層の砂岩角礫を転用したものと推測される。トレント1・2の土層観察から切岸の法面上端部をL字に切土し、前面に砂岩礫を積み上げた後、背後に2層類似のしまりの弱い風化土壤で充填し、ある程度の石積みの強度を保つ役割を果たしたと考えられる。

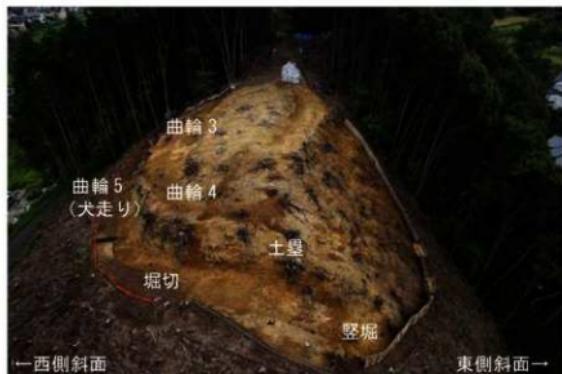
(3) 土壘・堀切・堅堀（第12図⑥～⑧、第20図～第21図、図版5）

土壘は主に3区9284c・9484bグリッド（第6図）にかけて連なっており、堀切と堅堀に接続している。土壘の土層観察を行うため、トレント3・4を設けて土層の堆積状況と堀切・堅堀の関係についての観察を行った。

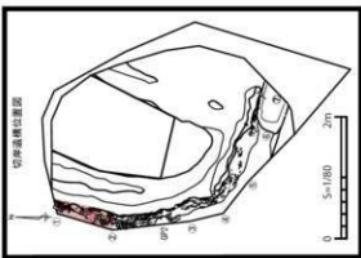
その結果、堀切・堅堀部分を4層である砂岩岩盤層まで掘削し、この掘削土（砂岩層を多く含む）を土壘用の盛土として転用している可能性が高いことがわかった。また、

土壘盛土の基底面にあたる部分に石積みが伴う箇所もあり、これらは4層をL字状にカットした後に砂岩礫を据え、背後にぶい黄褐色の砂礫層や砂質土層となる盛土を被せる手法を採用している。こうした盛土の工法は、切岸造構や北側通路部付近の盛土にも見られ、平ノ前城跡の縄張り構造を知るうえで、貴重な手がかりとなった。

南側の尾根筋を断ち切るように掘削された堀切は、東側斜面の中腹まで延びる堅堀とセット関係を成す。堀切の幅は4mほどである。なお、尾根続きとなる北側の盛土（切岸）より更に北寄りにも堀切があったと推定されるが、現在はミカン畠や私道などに改変されており、当時の原形を留めているのは南側に残る堀切だけである。また、東側斜面は西側斜面に比べ急峻で、傾斜角度も35度近くあり、測量や調査結果から容易には登城できない地形であることがわかった。そのため、平ノ前城跡の土壘・堀切・堅堀造構は、コンパクトな造りであるものの、切岸造構と合わせて防御拠点としての機能を十分果たしており、境目地域の重要な拠点としてだけではなく、陣城としての側面も併せ持つ山城であったと考えられる。

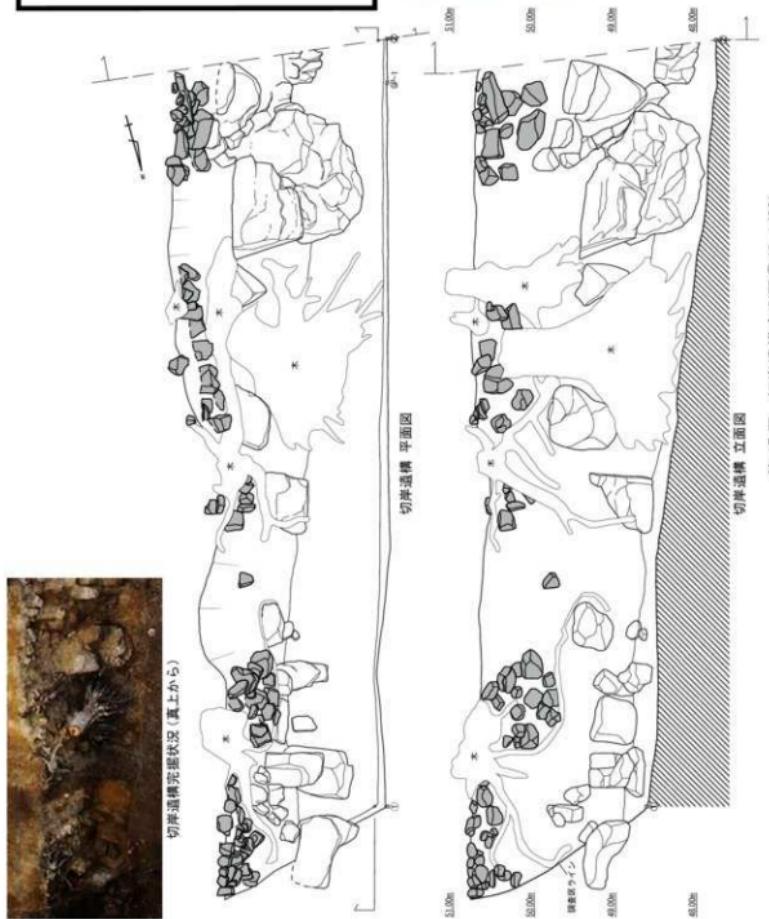


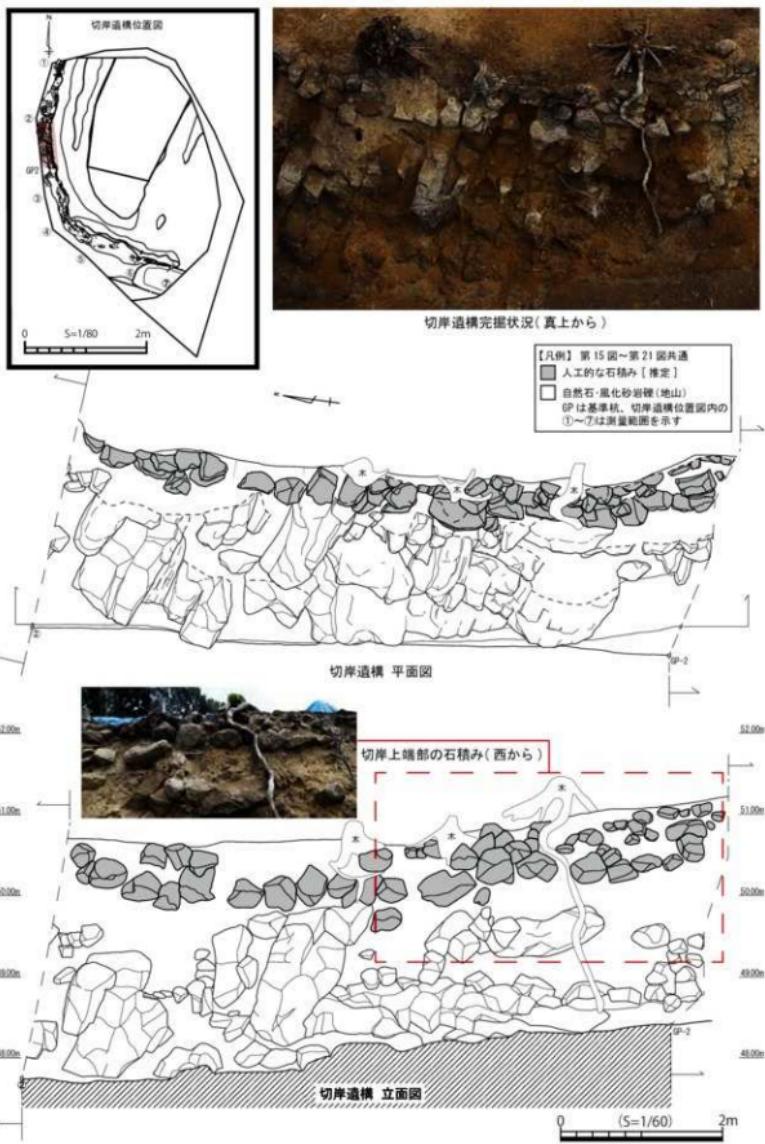
図版5 平ノ前城跡近景（南から）



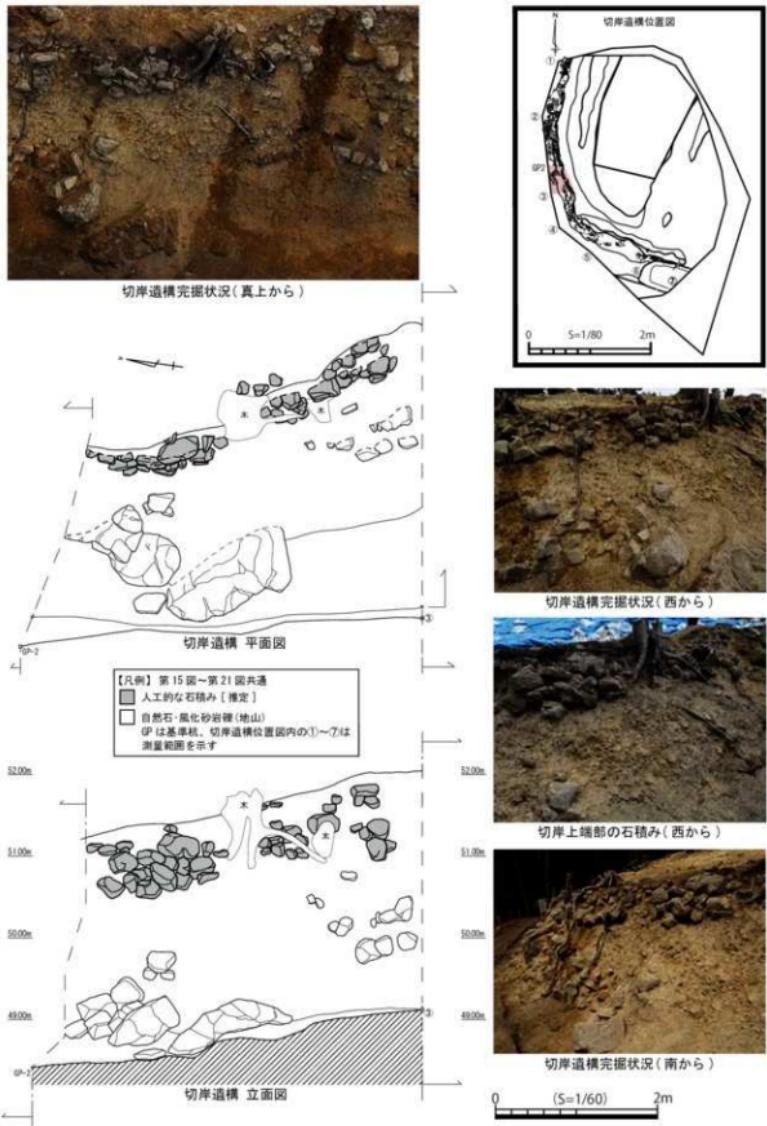
切岸邊縫完壁状況（北西から）
【凡例】第15區～第21區
■人工化した石組み・堆積
□自然石・風化砂岩層
△は急速、△は緩慢の位置を示す
①は7-12m測量範囲を示す

0 (S=1/60) 2m

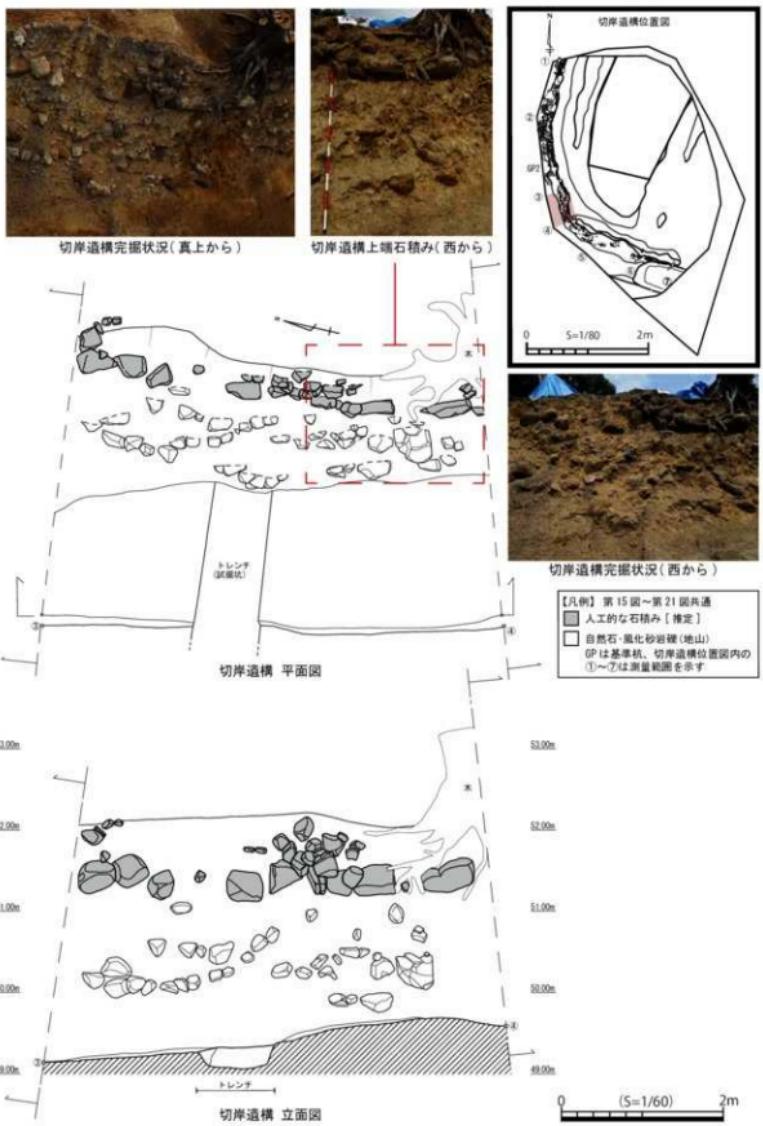




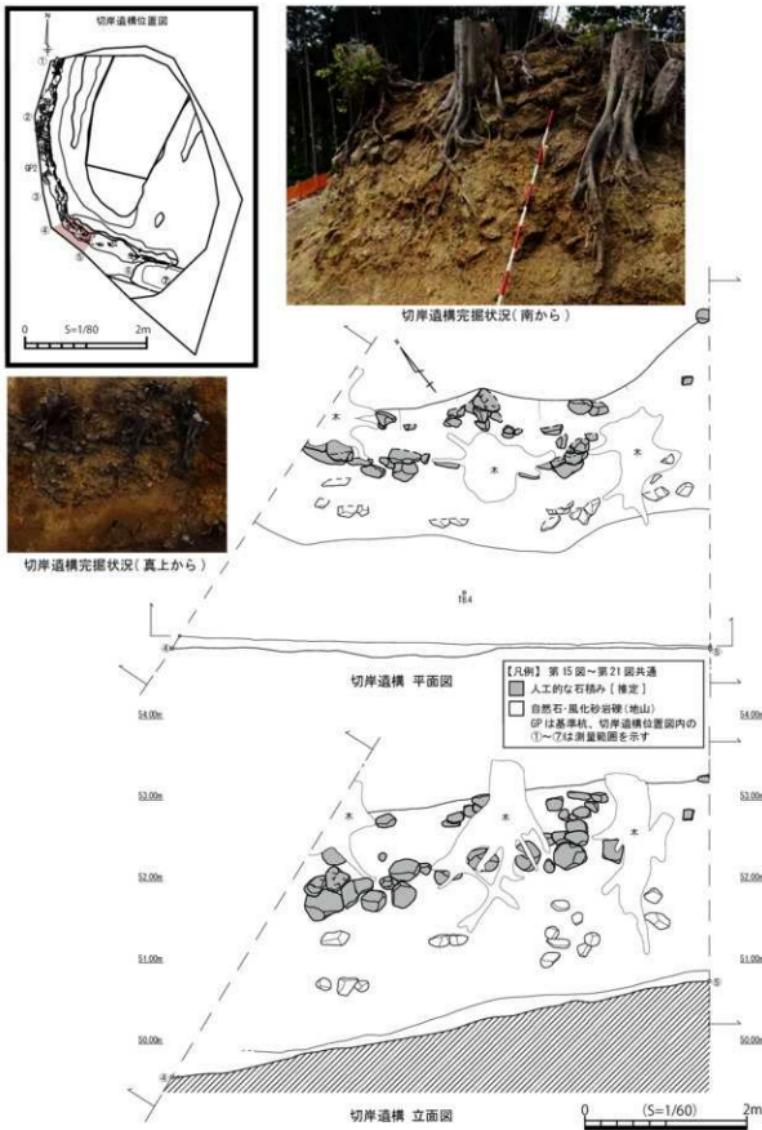
第16図 切岸遺構実測図②(S=1/60)



第17図 切岸遺構実測図③($S=1/60$)



第18図 切岸遺構実測図④(S=1/60)

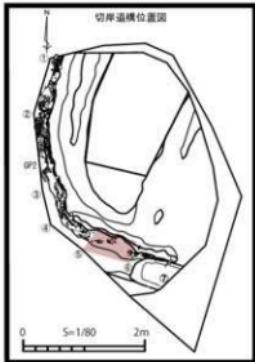


第19図 切岸造構実測図⑤(S=1/60)



土壌・堀切造構完掘状況(南から)

【凡例】第15図～第21図共通
 ■ 人工的な石積み【推定】
 □ 自然石・風化砂岩壁(地山)
 GPは基準軸、
 切岸造構位置図内の①～⑦は
 測量範囲を示す



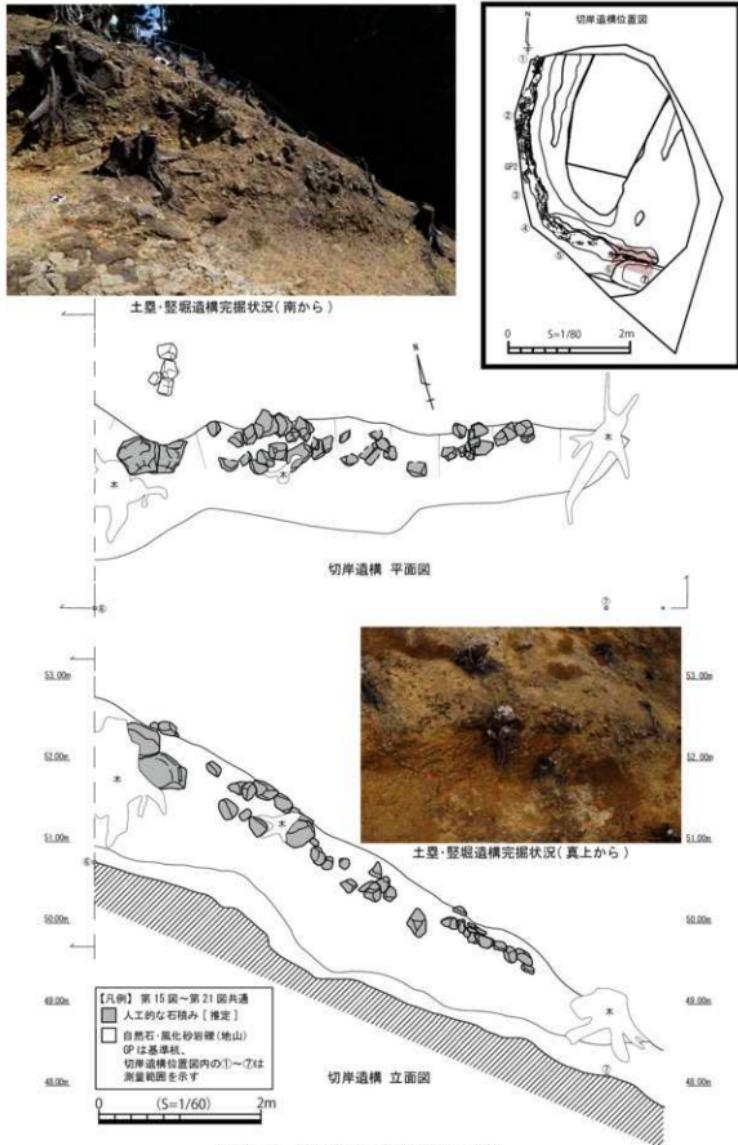
切岸造構 平面図



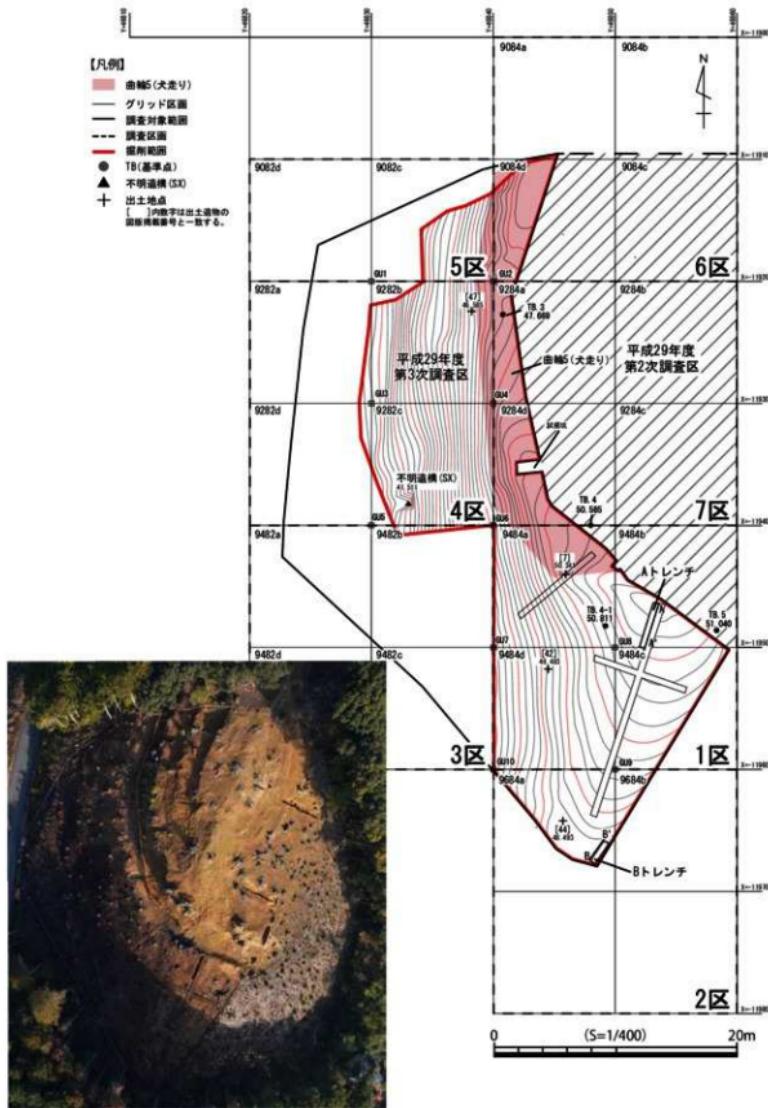
土壌・堀切造構完掘状況(真上から)



第20図 切岸造構実測図⑥(S=1/60)



第 21 図 切岸造構実測図⑦(S=1/60)



第22図 平成29年度第3次調査区(S=1/400)

(4) 第3次調査の状況（第22図～23図、図版6～図版7）

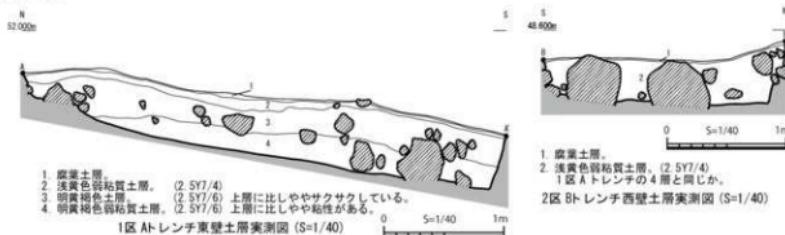
①1区Aトレーニチ（第23図・図版6）

堀切から南側尾根上に設定した1区と2区では、南北の十字ベルトと合わせて任意のAトレーニチ、Bトレーニチを設定し、土層観察を行った。

Aトレーニチは長さ4m、幅50cm、深さ50cm程度で、3層～4層にかけて拳大の礫層が混じる。1層は腐葉土層で、2層は比較的しまりが強く、2次堆積層と考えられる。3層は明黄褐色土層で、2層に比べるとしまりは弱い。2層から3層にかけては、堀切の造成に伴った掘削土（本来は4層に相当）が堆積した層と考えられ、尾根方向に向かって緩やかに傾斜する。4層は明黄褐色弱粘性土層で礫を多く含む基盤層である。なお、遺構、遺物については確認できなかった。

②2区Bトレーニチ（第23図・図版6）

Bトレーニチは長さ2m、幅60cm、深さ40cm程度で、人頭大の礫が一部露頭する。当初、Bトレーニチ付近を中心で露頭する礫や東側斜面に向かってやや落ち込む地形が見られたため、新たな石積み遺構または小規模な堅壠や柵跡が想定されたが、いずれも自然地形と判断し、遺構や遺物などは確認されなかつた。



第23図 第3次調査 A-Bトレーニチ土層実測図 (S=1/40)



1区 Aトレーニチ完掘状況（北西から）



2区 Bトレーニチ完掘状況（東から）

図版6 第3次調査トレーニチ調査状況

③不明遺構（SX）（第22図、図版7）

4区9282cの調査グリット内に露頭する自然石付近は、土壤が常に湿っており、湧水による影響と推測される。付近の調査の結果、西側斜面の道路脇に湧水地点が確認された。今回の調査では、この湧水地点や不明遺構の詳細な調査はできなかつたが、西側斜面には水曲輪に近い遺構の存在が考えられる。



図版7 4区 SX写真（北西から）

(5) 包含層出土の遺物

包含層の出土遺物については、調査年次や遺構出土及び区画毎ではなく、遺物の種別毎に掲載した。なお、遺構出土や層位が明確なものについては、遺物観察表（第3表～第6表）に別途掲載し、併せて出土遺物の細目別に分類した表とグラフを示した（第31図～第32図、第7表～第9表）。

① 東播系須恵質土器（第24図、図版8、第3表）

1～6は東播系須恵質土器の捏ね鉢である。出土地点は、曲輪1となる4区9284c～9284b（第6図）の3層から概ねまとめて出土しており、本来は同一個体であった可能性が考えられる。1は口縁部上下端部が拡張し、口縁の外面幅を広げる。また、口縁端部には比較的強いナデを施す。口縁断面の形状は三角形よりもT字形に近い。中世土器研究会事務局編年案⁽¹⁾によるとB3-II類のB3aまたはB3b系統の流れを汲む捏ね鉢と考えられ、概ね13世紀末から14世紀前半頃と位置づけられる。

2は捏ね鉢の底部で、1と同一個体か。内外面にナデを施す。内面はヨコナデとナデ上げの調整が認められる。外面には浅い沈線と底部付近の胴部にユビオサエの痕跡が残り、底部糸切りの際に付いたものであろう。3は内外面に丁寧なナデ調整を施し、外面には浅い沈線状の凹凸が見られる。全体的に焼成が甘く、軟質で浅黄色を帯びる。4は内外面にナデを施し、外面に浅い2条の沈線が見られる。底部には糸切り痕、高台疊付部分には小粒石がまとまって付着する。内面の一部に粗穀の痕跡が2ヶ所で確認される。5は1と同種のもので、口縁端部は内外面にヨコナデを施す。6は捏ね鉢の胴部。内外面にナデを施す。外面には4条ほどの凹凸面が見られる。器壁は薄手で、胎土は砂粒が目立つ。

② 瓦質土器（第24図、第3表）

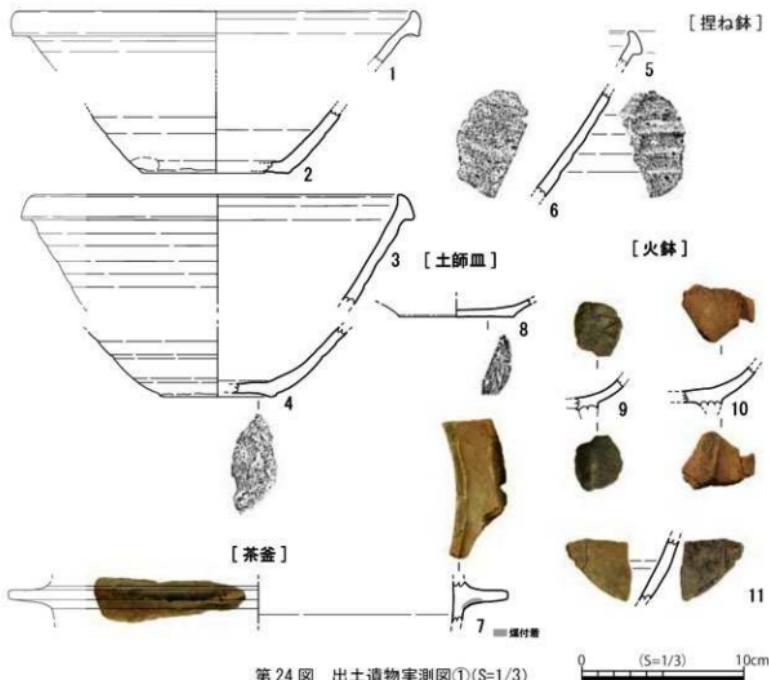
7は瓦質土器の煮炊き具で、茶釜あるいは羽釜の一部と推定される。胴部外面下に煤が付着する。内外面にナデ調整が見られ、胎土には微細の金雲母を含む。

③ 土師質土器（第24図、図版8、第3表）

8は土師質の皿である。見込みは扁平で底径は7.0cm。底部にナデ、外面にもナデの調整痕が認められる。内面は摩滅が著しく調整痕は不明瞭である。

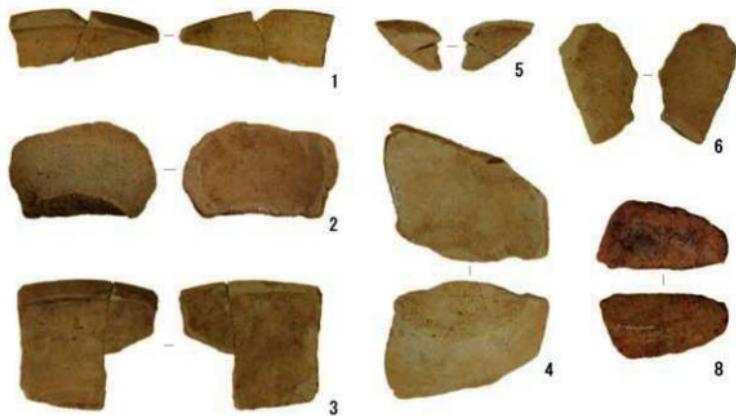
9～11は浅型火鉢と考えられる遺物である。火鉢は隣接する1区・2区の9084c・9086dから出土しており、元々は同一個体であった可能性が考えられるが、口縁部が出土していないため判然としない。9・10は火鉢の高台部である。9はわずかに高台裏が残る。10は内外面にナデ調整が認められる。11は胴部で内面にナデを施す。10・11の胎土はいずれもやや精緻で砂粒や金雲母を含む。色調はにぶい黄褐色を帯びる。

長崎県内の城館跡から出土した火鉢の類例としては、外面胴部に印刻文を施したタイプが比較的多く見られ、三城跡をはじめ針尾城跡、尾和谷城跡、沖城跡などで火鉢の出土例が報告されている。



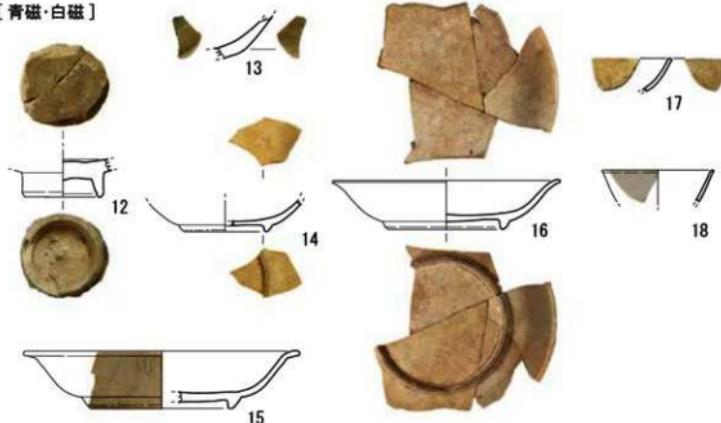
第24図 出土遺物実測図①(S=1/3)

0 (S=1/3) 10cm

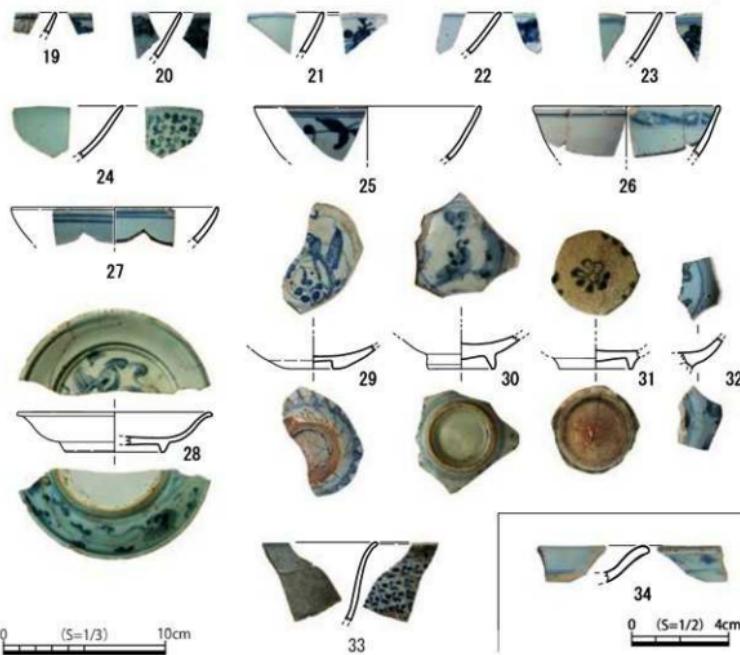


図版8 出土遺物①

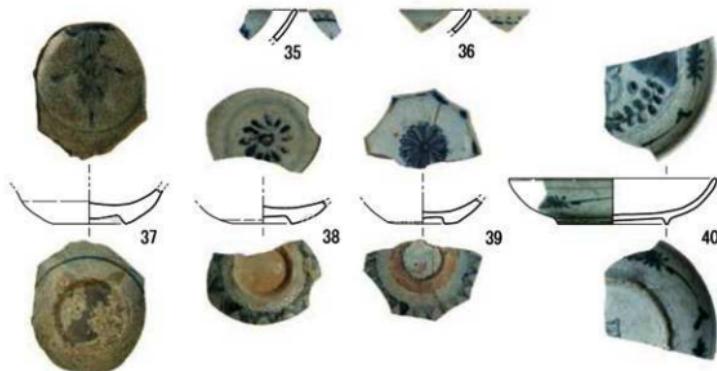
[青磁・白磁]



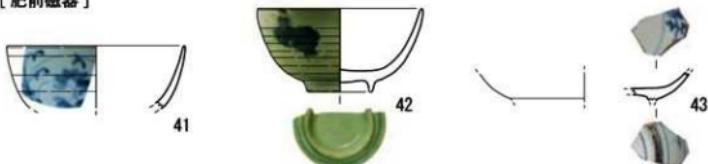
[染付(青花)]



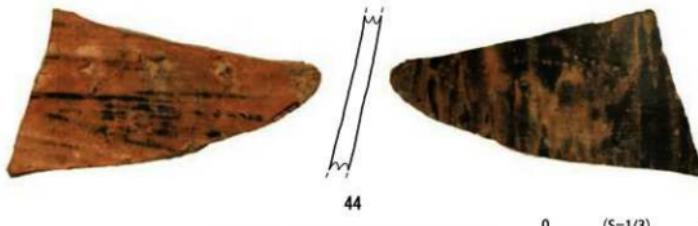
第25図 出土遺物実測図②($S=1/3 \cdot 1/2$)



[肥前磁器]



[陶器]



第26図 出土遺物実測図③(S=1/3)

0 (S=1/3) 10cm

④貿易陶磁（第25図～第26図、第4表）

a. 青磁・白磁

第25図12は、15世紀頃の龍泉窯系青磁碗の高台部と考えられる。器形の特徴から上田分類⁽²⁾の碗B類に近似する。焼成が甘く、胎土にはぶい黄色を帯びる。施釉は全体的に薄い仕上がりで、疊付を越えて高台内面途中までかかる。高台内は輪状に搔き取られ、露胎となっている。また、高台疊付の内側には浅い1条の沈線が認められ、見込み中央には輪状の落ち込みが見られる。13は、龍泉窯系青磁碗の胴部で底部に近い部位と考えられる。内外面ともに施釉が施され、貫入が認められる。胴部途中にはやや屈曲する稜線が見られる。

14～18は白磁の碗・皿である。特に14～16は森田分類⁽³⁾によるといずれもE-2類型の端反り皿タイプに位置づけられる。14は白磁小皿の底部で、高台疊付は露胎とする。胎土はやや精緻で、釉は全体的にぶい黄色味を帯びる。15・16は景德鎮窯系の白磁皿である。15は白磁のヒビ焼皿か。口縁部は端反りし、高台疊付は露胎する。16は3次調査時の5区9082cの西側斜面地から出土したものである。胎土は精緻であるが、高台疊付のみ露胎となる。釉は白色よりも黄色味に近い。森田分類ではE-2・b類に近似する白磁皿であろうか。17・18は薄手の白磁小碗の口縁部である。17は焼成が甘く、全体的に黄色味を帯びる。18の口縁はやや外反し、胎土は精緻で乳白色の釉調を帯びる。

b. 染付（青花）

19～29・40は景德鎮窯系染付碗・皿と考えられるものである。19～27まではすべて染付碗の口縁部である。また、19～25は小野分類⁽⁴⁾によると染付碗C群系に分類される。19の口縁部はやや端反り気味で、内外面にそれぞれ1条の囲線を描く。20の口縁部の厚みは薄手で、内外面に山水図と思われるデザインが施されている。21は内外面にそれぞれ1条の囲線と外面に染付文様を施す。22の口縁部は外側にやや端反り気味で、外面に染付文様が見られる。23の口縁部の厚みは薄手で内面に1条の囲線。外面に2条の囲線と染付文様を施す。24・25は器形の特徴からやや口縁部が外側に開く蓮子碗系の碗の一部と推定される。24の外面体部には簡略龍文と丸文を組み合わせた染付文様を施す。25の口縁部は薄手の仕上げとなっており、内外面に2条の囲線を施し、外面に濃い呉須の青花を描ぐ。26は口縁内側に四方襷文帯を施す。27は口縁部の内外面に2条の囲線が入る。28は景德鎮窯系の唐草文染付皿である。内面見込みに玉取獅子、胴部に牡丹の唐草文を描く。口縁部は端反りし、高台疊付はヘラケズリにより斜めに面取りされ、露胎となる。續伸一郎氏⁽⁵⁾によると小野分類染付皿B1群(VII)、上田分類A-II類に分類される。年代は15c後半～16c前半頃の貿易陶磁と考えられている。29は景德鎮窯系の染付碁笥底皿。内面見込みに草花鳥文（植物はネジ花）、胴部外面に芭蕉葉文を描く。高台内は施釉されるが、高台疊付部分は釉を搔き取り露胎となる。小野分類では染付皿C群、上田分類ではA-I類（皿I）に分類される。

30～39は漳州窯系染付碗・皿と考えられるものである。30は器形から染付碗C群の蓮子碗系の特徴が見られる。見込み中央に人物画を描く。さらに見込み中央部には、渦巻状の稜線が見られる。高台疊付はヘラケズリにより露胎となる。外面胴部にも染付文様がわずかに見られるが欠損のため判然としない。おそらく唐草文系の文様であったと推測される。底径4.0cm。31は漳州窯系の粗製品である染付碗C群か。見込みに菊花文あるいは梅文を施す。施釉には貫入が見られ、高台内と疊付は露胎し、底部にはヘラミガキと考えられる調整痕が残る。底径4.4cm。32は染付碗の腰部。内外面にそれぞれ染付文様が認められる。全体的に底径は小さく小振りの碗であろうか。胎土は精緻で黒色粒子が付着する。33は染付碗B群の端反碗か。口縁は外反し、内面に2条の囲線、外面胴部に簡略龍文と丸文を組み合わせた文様を施す。34は口縁部が端反りする染付皿。小野分類では染付皿B2群（上田分類A-II類）に近似する。35・36は漳州窯系碁笥底皿の口縁部と思われる。口縁部外側に波涛文を描く。35は芭蕉葉文の先端部がわずかに残る。36の口縁はやや内湾気味で若干の膨らみをもつ。いずれも染付皿C群（上田分類A-I類）に該当する。

37～39は染付皿C群の碁笥底皿である。37の見込みには「華」の字を描く。全体的に貫入が見られ

るほか、高台疊付の内側部分には砂目が残り、高台の一部は露胎する。底径は4.4cm。色調は灰白で漳州窯産の粗製品と考えられる。**38・39**は見込みに菊花文、外面胴部に芭蕉葉文を描く。**38**の基筒底皿は、高台内と疊付の釉はヘラミガキによって搔き取られている。また、外面胴部には釉を搔き取った際に付着したと思われる釉だまりが散見される。**39**の高台内は施釉されるが、疊付部分は釉剥ぎにより露胎となっている。**40**は染付皿E群の景德鎮窯系の貿易陶磁と思われる。外面に染付文様を施す。底部の高台中央には匂い文字が確認される。疊付は釉剥ぎにより露胎となる。

⑤肥前磁器（第26図、第4表）

41・42は肥前磁器の染付丸形碗である。**41**の口縁はやや内湾し、外面胴部に唐草文を描く。17世紀頃の波佐見焼と推定される。概ね胎土は良好で、呉須の発色も良い。口径11cm。**42**は外面胴部にヘラケズリの調整痕が見られ、染付文様にはコンニャク印判を施す。高台疊付の一部に砂目が付着する。九州陶磁編年⁽⁶⁾によると江戸中期から後期頃（17～18世紀前半）にかけて作陶された波佐見焼産の肥前磁器と考えられる。**43**は調査区外から表採された肥前磁器系の染付皿である。出土した遺物は胴部から底部にあたる。外面に染付文様と複数の園線が施される。胎土は精緻で色調は灰白である。復元底径は8.5cm。

⑥陶器（第26図、第4表）

44は国内産陶器の甕で、鉄釉をかけたハンズーガメ系（飯洞）の大甕と推定される。内面に叩き成形と思われる痕跡が残る。ハンズーガメは貯蔵容器、醸造容器、肥甕などの日常生活用品として当時広く使用されていたものである。東中川氏によると⁽⁷⁾流通年代は18世紀前半頃ではないかと指摘されている。平ノ前城跡から出土したハンズーガメの用途としては貯蔵用の水甕が考えられ、出土地点（第22図：2区9684a）から西に下った道路脇には湧水地点が確認されている。しかし、ハンズーガメは近世期の陶器であるため、山城の想定年代とする16世紀からは年代差があり、具体的な用途の判断を下すには得られた情報が乏しく、水甕と湧水地点の関連性については検討を要する。

⑦石製品（第27図～第28図、図版9～10、第5表）

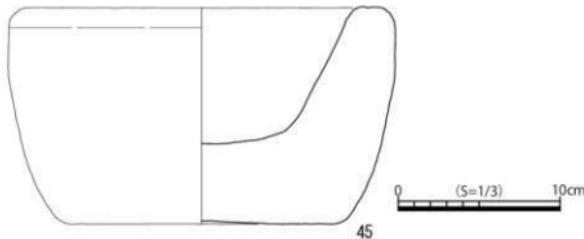
a. 石製容器

45は凝灰岩質の石製容器である。一部表面と断面には被熱を受けたと考えられる赤色を帯びる。手水鉢としては口径が小さく、煮炊き用の鍋としても実用性に欠ける。同様の石製容器の出土例としては、大村市の坂口館跡や三城城下跡から内面を削り込んだ厚手づくりの容器が報告されている。

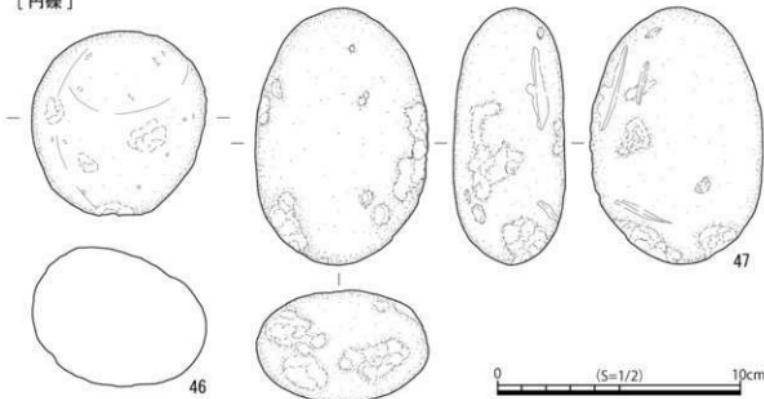
b. 円礎

46・47はトレンチ3と西侧斜面の犬走り脇から出土した安山岩質の円礎である。形状は角が取れた川原石と推定され、山城の防御のために投石に転用した可能性が考えられる。**46**は側面に使用痕らしき痕跡が見られる。県内の城館では松浦党一族である志佐氏の居城と伝わる直谷城跡から矢石置場が発見されており、断崖上に人頭大の玄武岩を多数集積している事例が報告されている。

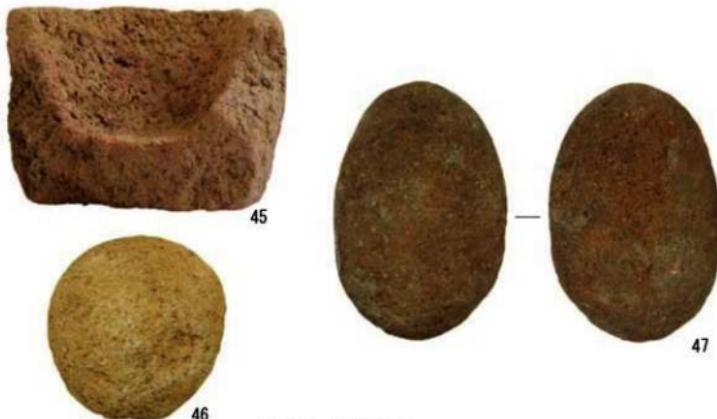
[石製容器]



[円碟]

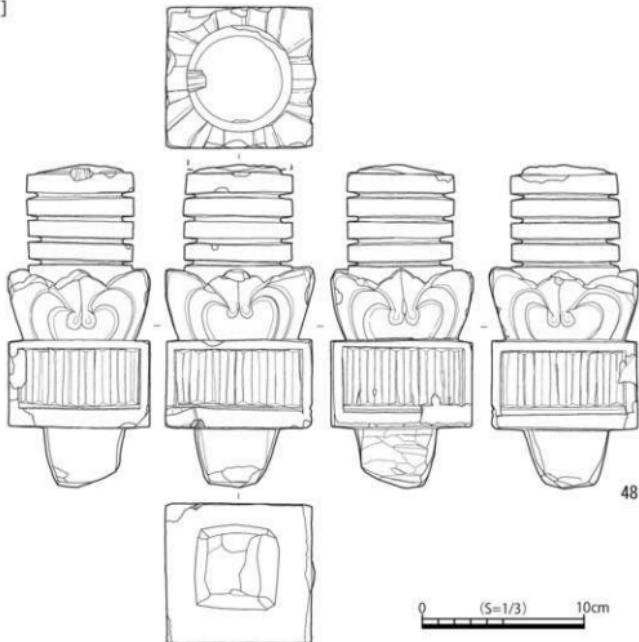


第27図 出土遺物実測図④(S=1/3・1/2)



図版9 出土遺物②

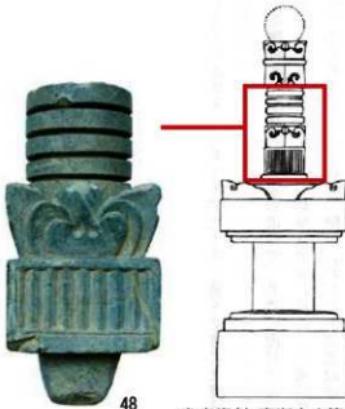
[石塔]



第28図 出土遺物実測図⑤(S=1/3)



石塔出土状況（東から）



参考資料：東漸寺宝篋印塔
※出典：大石一久「佐世保の中世・石造美術」
『佐世保市史通史編（上巻）』より転載

図版10 出土遺物③

c. 石塔

48は中世の宝篋印塔の相輪部である。相輪部は途中で欠損しており、欠損部分には意図的に打ち欠いたと思われる傷の痕跡が残る。おそらく九輪が延長していたか、上部請花が接地していたものと考えられる。石材は良質の緑泥片岩製（西彼杵半島産か）を使用し、彫出も丁寧な仕上げと見事な装飾が施されていることから造立階層は比較的身分の高い人物であった可能性が高い。石材の特徴から建塔年代は南北朝期から室町中期にかけてのものと推定される。相輪下部の請花は猪目の複弁で、橋型の伏鉢は郭内に綻連子を刻む。牘は四角型で15世紀頃の特徴を示しており、平ノ前城跡付近にあつたと考えられている幸久寺との関連性が指摘される。

⑧金属製品（第29図～第30図、図版11～12、表6）

a. 煙管

49は第1次調査で検出された石積遺構（SW）の脇下から出土した煙管の吸口部分である。材質は青銅製で、吸口内には竹製の羅宇が残存する。

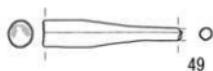
b. 不明鉄器

50は2区9086dの2層から出土した鉄製品。残存部は比較的平坦でまっすぐである。

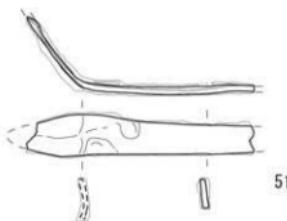
c. 刀子か

51は第2次調査の3区9286d内のトレンチ5から出土した鉄製品。刀子の一部と考えられる。途中で折れ曲がっており、折面に向かって幅が広がる。

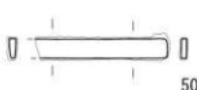
[煙管]



[刀子か]

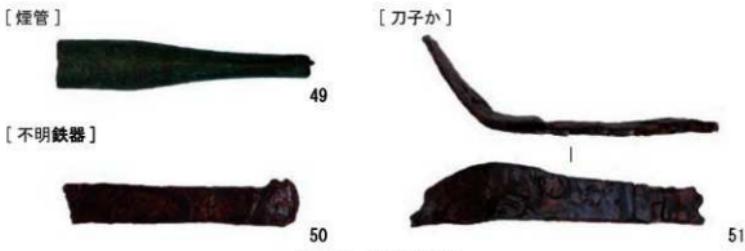


[不明鉄器]

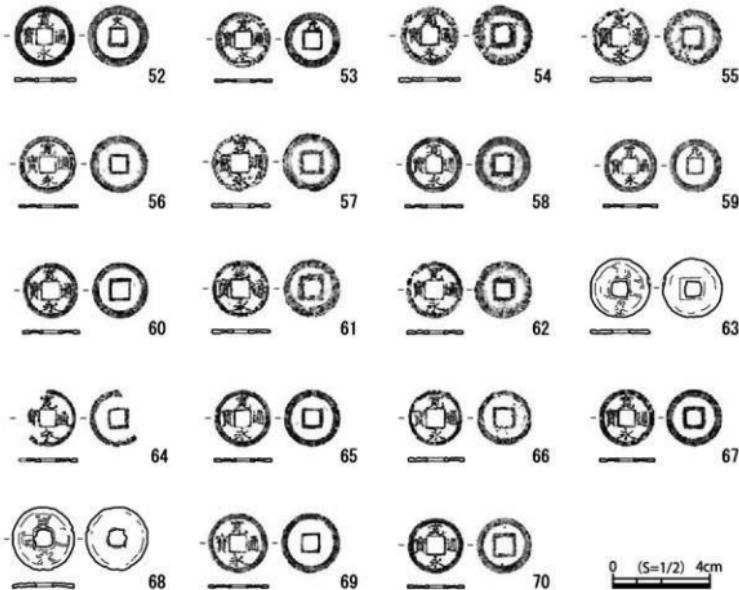


0 (S=1/2) 4cm

第29図 出土遺物実測図⑥(S=1/2)



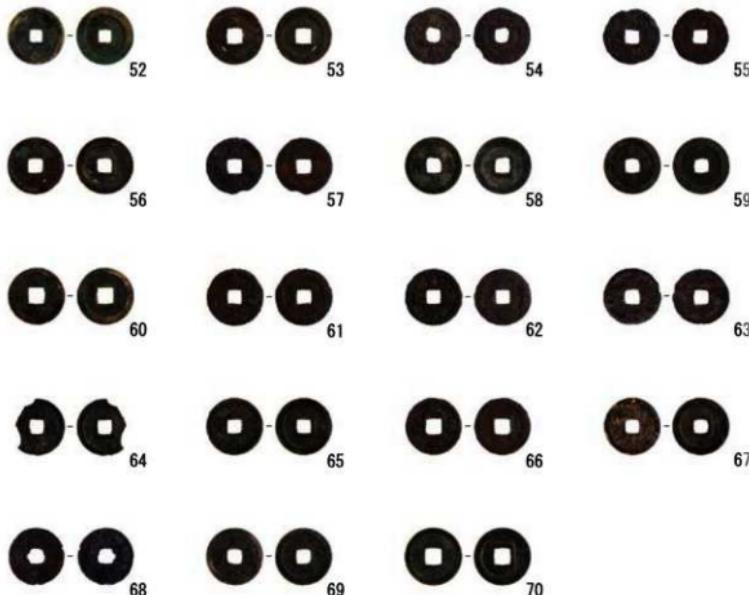
図版 11 出土遺物④



第 30 図 出土遺物実測図(7)(S=1/2)

d. 出土銭貨

52 ~ 70 の寛永通宝は、すべて 4 区 9284d グリッドの曲輪 4 の 2 層からまとめて出土したものである（図版 12、第 6 表）。一部の寛永通宝は、複数個体が接着し、組織維が残った状態であった。葬送儀礼の六文銭とも考えられたが、周辺に明確な墓域は確認されておらず、出土銭貨の使用形態は不明である。なお、長崎県埋蔵文化財センターの協力を得て、保存処理を行った結果、接着した個体はすべて分離し、19 個体となった。材質分析によると銅銭と鉄銭が交互に含まれていたことが新たに判明した。また、寛永通宝の鋳造年代は、肉眼観察から得られた情報によると主に寛文期から寛保期にかけて流通したものが多く含まれていることがわかった。



曲輪4 出土銭貨集中地点
任意トレンチ北壁土層(南から)



組織維付き銭貨出土状況



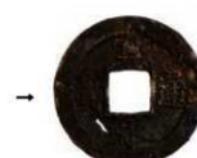
接着した状態の出土銭貨



組織維の顕微鏡写真
【写真提供：長崎県埋蔵文化財センター】



保存処理前の銭貨 [No. 53]



保存処理後の銭貨 [No. 53]

図版 12 出土遺物⑤

52は新寛永の文銭で正字背文のものである。「寶」の字体の最終2画が「ハ」の字になっており、「通」の字体はユ頭通である。字体などの特徴から寛文期の江戸亀戸銭座産島屋文系の文銭と考えられる。53は新寛永の背元銭である。背元銭の多くは、寛保元年(1741)に大阪高津新地で鋳造されていたことが知られている。54・55は鉄銭の寛永通宝である。54の「寛」は跳ねが長く伸びる虎の尾寛小字の特徴があり、元文期から寛保期にかけて見られる書体の一つである。なお、鉄銭の鋳造開始は元文4年(1739)以降と推定されている。56は新寛永の銅銭である。「寶」より「通」の字体がやや小さく、之縁の折れ部分が丸くなっていることから清水短通系と思われる。背には星と呼ばれる丸点が確認できる。57は腐食があるものの鉄銭である。

58は新寛永の銅銭で虎の尾寛小字の特徴が見られる。「通」の字体はコ頭通で、背文字はない。字体の特徴から江戸深川十万坪銭系の寛永通宝と考えられる。59は新寛永の背元銭である。全体にやや文字が太く、「寶」「爾」が全体的に郭部分(四角穿の縁)に接地し、寶冠がわずかに右肩下がりの特徴が見られることから寛保期の大阪高津新地産の「中字接郭寶背元」の寛永通宝であろうか。

60～64の寛永通宝は、元々は複数個体が接着した状態で出土したものであったが、保存処理の過程で分離したものである。60は銅銭で字体はやや太く、「含二水永」の特徴が見られる。61～63は鉄銭。63は腐食により文字は判然としない。64は銅銭で「通」の字体はマ頭通である。65は新寛永の銅銭で、56と同様に「寶」より「通」の字体がやや小さく、「永」の最終画が上に跳ね上がる。66は鉄銭のコ頭通。67は銅銭のコ頭通で、「寛」の最終画は上に跳ね上がる。「永」の柱は湾曲せず、まっすぐで力強い印象を受ける。68は鉄銭。腐食により文字は判然としない。

69は新寛永で、「通」の字体はマ頭通である。全体的に細字で、「永」の字が郭中央よりもやや左側に寄っていることから不旧手の進永と思われる。全体の字体から京都・七条銭に類似する。鋳造年代は元禄期頃と推定される。70は新寛永で、「通」の字体はコ頭通である。「寛」の跳ねが長く伸びる虎の尾寛小字、「永」の柱がやや短いなどの特徴が見られる。背には2つの小さな星が確認できる。銭貨の書体から元文期頃の鋳造と考えられる。

第3表 出土土器観察表

図版番号	遺物名称	調査地区 (グリット)	遺構・層位	法 量(cm) 口径 底径 器高	色 調		胎 土	生産地	備 考
					外 面	内 面			
1	須恵質土器 捏ね跡	4区 9284b	曲輪1 3層	24.1 - (3.2)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR7/4)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR7/4)	金雲母 砂粒子 黒色粒子	国産	東播系B3-II型 (B3aまたはB3b系統)
2	須恵質土器 捏ね跡	4区 9284b	曲輪1 3層	- 9.0 (3.9)	灰白色 (Hue10YR8/2)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR7/3)	金雲母 長石 黒色粒子	国産	東播系 底部丸切り
3	須恵質土器 捏ね跡	4区 9284c	曲輪4 2層	22.0 - (6.5)	浅黄色 (Hue2.5Y7/3)	浅黄色 (Hue2.5Y7/4)	金雲母 長石 砂粒子	国産	東播系B3-II型 (B3a系統か)
4	須恵質土器 捏ね跡	4区 9284b	曲輪1 3層	- 6.5 (4.3)	淡黄色 (Hue2.5Y8/3)	淡黄色 (Hue2.5Y8/4)	やや緑微 金雲母 長石 石英	国産	東播系 底部丸切り
5	須恵質土器 捏ね跡	4区 9284b	曲輪1 3層	- - (2.1)	浅黄色 (Hue2.5Y7/4)	浅黄色 (Hue2.5Y7/4)	金雲母 長石 石英	国産	東播系
6	須恵質土器 捏ね跡	4区 9284b	曲輪1 3層	- - (6.4)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR6/4)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR7/3)	金雲母 砂粒子 黒色粒子	国産	東播系
7	瓦質土器 茶葉	1区 9484a	2層	- - (2.5)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR7/4)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR7/3)	精細 金雲母 砂粒子	国産	在地系か
8	土師質土器 土師皿	4区 9284b	曲輪1 1層	- 7.0 (1.1)	褐色 (Hue7.5YR8/6)	褐色 (Hue10YR7/6)	やや粗雑 雲母 赤色粒子	国産	
9	土師質土器 火鉢	1区 9084c	曲輪1 1層	- - (1.9)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR6/3)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR6/3)	雲母 赤色粒子 白色粒子 黒色粒子	国産	
10	土師質土器 火鉢	2区 9086d	曲輪2 1層	- - (2.4)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR7/4)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR8/4)	やや緑微 砂粒 金雲母	国産	
11	土師質土器 火鉢	1区 9084c	曲輪3 2層	- - (3.8)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR6/4)	[に]い 黄褐色 (Hue10YR7/3)	やや緑微 金雲母 砂粒子	国産	

第4表 出土磁器・陶器観察表

図版番号	遺物名称 (グリット)	調査地区 (グリット)	遺構・層位	法量(cm) 口径 底径 器高	色調		胎土	生産地	備考
					外面	内面			
12	青磁碗	4区 9084c	曲輪1 3層	- 4.6 (2.3)	淡黄褐色 (Hu+10YRB/3)	淡黄色 (Hu+5YB/3)	やや繊維 粉粒子	中国 龍泉窯	青磁碗B類(上田)
13	青磁碗	4区 9284a	曲輪4 2層	- - (2.6)	灰黄色 (Hu+2.5Y/6.2)	灰黄色 (Hu+2.5Y/6.2)	精緻	中国 龍泉窯	
14	白磁小皿	4区 9284c	1層	- 5.0 (1.9)	淡黄褐色 (Hu+10YRB/3)	ふくらむ黄褐色 (Hu+10YR/4)	やや繊維 黑色粒子	中国 白磁皿C群(小野)	
15	白磁皿	2区 9286a	曲輪2 2層	16.8 8.7 3.5	灰白色 (Hu+5Y/8.1)	淡白色 (Hu+5Y/8.1)	精緻 黑色粒子	中国 白磁皿C群(小野)	白磁皿A類(上田)
16	白磁皿	5区 9082c	西側斜面 1層	14.0 7.0 3.0	灰白色 (Hu+2.5Y/8.2)	淡白色 (Hu+2.5Y/8.2)	精緻	中国 白磁皿A類(上田)	E-2・5型系(森田)
17	白磁小碗	2区 9286a	曲輪2 2層	- - (2.0)	灰白色 (Hu+2.5Y/8.1)	淡白色 (Hu+2.5Y/8.2)	やや繊維	中国か?	
18	白磁小碗	3区 9284c	曲輪1 1層	6.8 - (1.9)	灰白色 (Hu+5Y/8.1)	灰白色 (Hu+5Y/8.1)	精緻 黑色粒子	中国か?	
19	染付碗	4区 9284b	曲輪1 1層	- - (1.3)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	精緻	中国 景德鎮窯	染付碗C群(小野)
20	染付碗	4区 9084c	曲輪1 3層	- - (2.8)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	精緻	中国 景德鎮窯	染付碗C群(小野)
21	染付碗	2区 9086d	曲輪2 2層	- - (2.5)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	精緻	中国 景德鎮窯か?	
22	染付碗	1区 9084c	曲輪1 1層	- - (2.5)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	精緻 黑色粒子	中国 景德鎮窯か?	
23	染付碗	4区 9084c	曲輪1 3層	- - (3.0)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	精緻 黑色粒子	中国 景德鎮窯	染付碗C群(小野)
24	染付碗	2区 9286a	東側斜面 2層	- - (3.2)	青明白色 (Hu+5BG/7)	青明白色 (Hu+5BG/7)	精緻 黑色粒子	中国 景德鎮窯	染付碗C群(小野)
25	染付碗	1区 9084c	曲輪1 1層	13.8 -	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	精緻	中国 景德鎮窯	染付碗C群(小野)
26	染付碗	2区 9086d	曲輪2 1層	11.2 -	灰白色 (Hu+7.5YB/1)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	精緻 黑色粒子	中国 景德鎮窯	
27	染付皿	4区 9084d	曲輪3 2層	12.6 -	灰白色 (Hu+5GYB/1)	灰白色 (Hu+5GYB/1)	精緻 黑色粒子	中国 景德鎮窯	
28	染付皿	3区 9286a	東側斜面 2層	11.6 6.0 2.45	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	明緑灰色 (Hu+2.5GYB/1)	精緻	中国 景德鎮窯	染付皿B群(小野)
29	染付皿	1区 9286a	曲輪6 2層	- 3.0 (1.4)	灰白色 (Hu+2.5GYB/1)	灰白色 (Hu+2.5GYB/1)	精緻	中国 景德鎮窯	染付皿C群(小野)
30	染付碗	3区 9284c	曲輪1 2層	- 4.0 (2.0)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	精緻 黑色粒子	中国 潭州窯	染付碗C群(小野)
31	染付碗	1区 9084c	曲輪1 1層	- 4.4 (1.1)	淡黄色 (Hu+2.5Y/3)	灰白色 (Hu+2.5Y/3)	やや繊維 粉粒子	中国 潭州窯	染付碗C群か?
32	染付碗	調査区外 表探	-	- (1.9)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	精緻 黑色粒子	中国 潭州窯	
33	染付碗	3区 9284b	曲輪1 1層	- - (4.8)	灰白色 (Hu+2.5GYB/1)	灰白色 (Hu+2.5GYB/1)	精緻 黑色粒子	中国 潭州窯	染付碗C群(小野)
34	染付皿	1区 9084c	曲輪1 1層	- - (1.6)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	精緻 黑色粒子	中国 潭州窯	染付皿C群(小野)
35	染付皿	3区 9286a	曲輪2 2層	- - (1.9)	灰白色 (Hu+5GYB/1)	灰白色 (Hu+5GYB/1)	やや繊維 黑色粒子	中国 潭州窯	染付皿C群(小野)
36	染付皿	4区 9084c	曲輪3 2層	- - (1.5)	灰白色 (Hu+2.5GYB/1)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	精緻 黑色粒子	中国 潭州窯	染付皿C群(小野)
37	染付皿	3区 9286a	曲輪2 1層	- 4.4 (2.1)	灰白色 (Hu+5YB/1)	灰白色 (Hu+5YB/1)	やや繊維 粉粒子	中国 潭州窯	染付皿C群(小野)
38	染付皿	1区 9084c	曲輪3 2層	- 3.6 (1.4)	灰白色 (Hu+5YB/1)	灰白色 (Hu+5YB/1)	やや繊維	中国 潭州窯	染付皿C群(小野)
39	染付皿	4区 9084c	曲輪3 2層	- 3.2 (1.5)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	明緑灰色 (Hu+7.5GYB/1)	精緻 黑色粒子	中国 潭州窯	染付皿C群(小野)
40	染付皿	4区 9084c	曲輪1 1層	12.6 6.8 2.8	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	やや繊維	中国 潭州窯	染付皿C群(小野)
41	染付碗	3区 9286d	曲輪7 2層	10.8 -	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	灰白色 (Hu+10Y/8.1)	精緻 黑色粒子	中国 潭州窯	染付碗C群(小野)
42	染付碗	1区 9484d	2層	10.0 4.0 5.1	灰白色 (Hu+10Y/7.2)	灰白色 (Hu+10Y/7.2)	精緻 黑色粒子	中国 潭州窯	染付碗C群(小野)
43	染付皿	調査区外 表探	-	(8.5) (1.8)	灰白色 (Hu+2.5YB/1)	灰白色 (Hu+5YB/1)	精緻 黑色粒子	中国 潭州窯	染付皿C群(コンニツカ印押)
44	壺?	2区 9684a	2層	- - (9.4)	黒褐色 (Hu+5YR/2)	にぶい赤褐色 (Hu+5YR/4)	白色粒子 赤色粒子 墨石	国産陶器	ハンゼーメ系

第5表 出土石製品観察表

図版番号	遺物名称 (グリット)	調査地区 (グリット)	遺構・層位	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
45	石製容器	4区 9284d	曲輪4 2層	凝灰岩質	13.2	23.7	6.6	2,635	表面に赤色あり
46	円礎	3区 9284c	土壘 2層～3層	安山岩質	7.5	7.2	5.7	305	河原石(投石か?)
47	円礎	4区 9282b	西側斜面 2層 (大走り下)	安山岩質	10.5	7.1	4.6	360	河原石(投石か?)
48	宝鏡印塔 相輪部	2区 9286a	東側斜面 2層	綠泥片岩質	20.0	9.2	8.7	2,515	

第6表 出土金属製品観察表

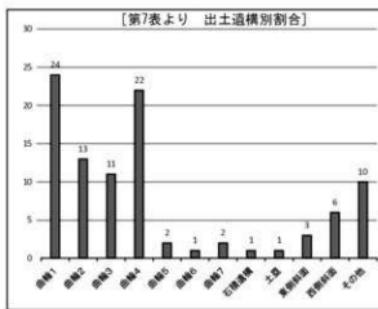
図版番号	遺物名称	調査地区(グリット)	遺構	層位	材質	法量(cm)※鉄賓のmm単位			重量(g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
49	煙管(吸口)	2区 9086d	石組牆	1層	青銅	(5.7)	(1.1)	(0.58)	3.86	内部に木製羅字残存(竹製)
50	不明鉄器	2区 9086d	-	2層	鉄	(5.4)	(0.8)	(0.25)	4.5	
51	刀子か	3区 9286d	曲輪7 (Tr5)	1層	鉄	(9.3)	(1.65)	(0.2)	15.0	
52	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	25.0	25.0	1.31	3.87	青「文」(元錢)、新寛永(寛文期竈戸錢) 初鋳年:1668年
53	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	23.0	23.0	1.08	2.49	青「元」(元錢)、新寛永(寛保期高津錢) 初鋳年:1741年
54	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	鉄	25.0	25.0	1.88	3.36	「寛」は虎の尾寛小字か。(元文期)
55	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	鉄	24.0	25.0	1.80	3.06	
56	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	24.0	24.0	1.13	2.07	清水短通系か。背星あり
57	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	鉄	24.0	24.0	1.49	2.85	
58	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	23.5	23.5	0.95	2.47	「寛」は虎の尾寛小字か。(元文期) 江戸深川十万坪筋系
59	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	22.0	22.0	1.0	2.06	青「元」(元錢)、新寛永(寛保期高津錢) 中字接部寛元か。
60	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	23.0	23.0	1.26	3.05	合二水永か。
61	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	鉄	24.0	24.0	1.50	2.96	
62	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	鉄	24.0	24.0	1.42	2.71	
63	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	鉄	24.0	24.5	1.47	2.52	
64	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	23.5	20.5	1.22	1.90	
65	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	23.5	23.5	1.25	2.99	
66	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	鉄	23.0	23.0	1.46	2.38	
67	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	23.5	23.5	1.20	3.6	
68	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	鉄	25.5	25.5	1.96	2.72	
69	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	24.5	24.7	1.14	2.85	不旧手の進永か。
70	寛永通宝	4区 9284d	曲輪4	2層	銅	23.0	23.0	1.0	2.63	「寛」は虎の尾寛小字か。(元文期) 背星あり

第7表 出土遺物量一覧表

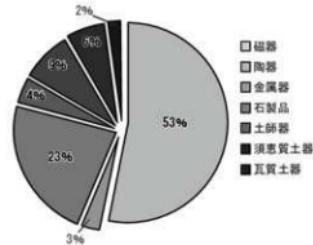
曲輪1	曲輪2	曲輪3	曲輪4	曲輪5	曲輪6	曲輪7	石積造模	土壙	東側斜面	西側斜面	その他	合計
24	13	11	22	2	1	2	1	1	3	6	10	96
25%	14%	11%	23%	2%	1%	2%	1%	1%	3%	6%	10%	100%

第8表 出土遺物内訳表

磁器	陶器	金属器	石製品	土師器	須恵質土器	瓦質土器	合計
51	3	22	4	8	6	2	96



[第8表より 出土遺物割合]

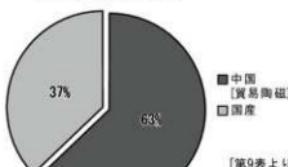


第31図 出土遺構・遺物割合

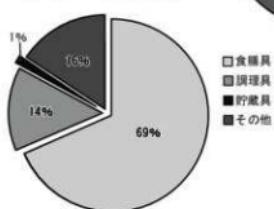
第9表 出土土器・陶磁器内訳表

器種	食器具			調理具		貯蔵具		その他 不明	小計
	碗	皿	杯	鍋・蓋	鉢	壺	蓋		
中国 (貿易陶磁)	青磁 [龍泉窯系]	2	-	-	-	-	-	-	2
	白磁 [景德鎮窯系含む]	2	6	-	-	-	-	2	10
	染付 [景德鎮窯系]	5	10	-	-	-	-	-	15
	染付 [漳州窯系]	6	7	-	-	-	-	-	13
	貿易陶磁 [产地不明]	1	1	-	-	-	-	2	4
	小計	16	24	0	0	0	0	4	44
国産	磁器 [肥前磁器]	6	1	-	-	-	-	-	7
	陶器	-	-	-	-	1	-	2	3
	土師器	-	1	-	-	3	-	4	8
	須恵質土器 [東播系]	-	-	-	6	-	-	-	6
	瓦質土器	-	-	-	1	-	-	1	2
	小計	6	2	0	1	9	1	0	26
合計		22	26	0	1	9	1	0	70

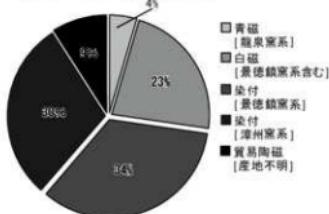
[第9表より 產地別割合]



[第9表より 機能別割合]



[第9表より 輸入陶磁器窯別割合]



第32図 出土遺物細目別割合

(6) 小 結

平ノ前城跡の調査では、中世～近世の遺物を中心に約100点が出土した（第7表、第8表）。そのうち中世の遺物が出土点数の半数以上を占め、中国産貿易陶磁が約6割と最も多かった（第32図）。貿易陶磁の内訳をみると、龍泉窯系青磁碗、景德鎮窯系の白磁皿と染付碗・皿、漳州窯系染付碗・皿が44点出土しており、碗類よりも皿類が多い傾向にあった。碗類は15世紀後半から16世紀中頃にかけて輸入されたと考えられる内底の見込みが窪んだ蓮子碗タイプの染付碗C群（小野分類）が目立った。

皿類では、端反口縁の高台付皿や外底部の中央を削りこんだ幕筒底皿が出土している。このうち第25図28は染付皿B群に分類される景德鎮窯系の唐草文染付皿で、いわゆる内面見込みに玉取獅子を描くタイプである。このタイプは、博多遺跡群や針尾城跡からも出土例がある。これは幕筒底皿と共に伴していることから少なくとも平ノ前城跡が15世紀後半～16世紀にかけて利用されていた山城であったことを裏付ける資料といえる。

一方で国産である肥前磁器では、碗類がほとんどであった。波佐見焼のくらわんか碗やコンニャク印判の染付丸形碗タイプで近世期の所産であることから平ノ前城跡の想定年代よりも後世に下る遺物である。近世期を補う出土遺物としては、2次調査時の4区9284aからまとまって出土した寛永通宝があり、1661年～1741年（寛文～寛保年間）に鋳造、流通した銭貨を中心としている。このことは山城としての機能を失った（廢城後）以降も何らかの理由で土地利用されていたことを窺わせる。

出土遺物の特徴を機能別に示した割合（第32図）をみると、食膳具が69%で最も多く、その他を除くと調理具の14%がこれに続く。出土した調理具としては、東播系須恵質土器の捏ね鉢と瓦質土器の茶釜が確認されている。貯蔵具に関しては、ほとんど出土しておらず、わずかに陶器の甕片1点が確認されているだけである。この陶器片はハンズーガメ系のものであり、18世紀前半頃と推定される遺物である。従って、平ノ前城の活動年代にあたる中世の貯蔵具は今回の調査においては確認されていない。機能別割合からは、食膳具と調理具は一定の出土量が見られることから生活は可能であるが、貯蔵具が共伴して出土していないため蓄えを必要とする長期滞在型の山城ではなく、臨時の性格を帯びた境目の山城であったことが窺がえる。

次に出土した地点（第31図、第7表）で見てみると、頂上部付近にあたる曲輪1からの出土数が25%と最も多く、次に曲輪4が23%、曲輪2の14%と続く。山城の外輪部にあたる曲輪5～曲輪7周辺から出土した遺物は、曲輪1～曲輪4の上方からの流れ込みによる出土であった可能性が高い。

今回の調査では、地形測量や調査で得られた情報から曲輪1～曲輪7までを山城に伴う曲輪と位置づけた（第13図）。それぞれの曲輪の関係性を見てみると主郭部分となる頂上部に広がる平坦部を曲輪1、東側に取り巻く平坦部を曲輪2、西側に曲輪3と曲輪4が付帯する。曲輪2～曲輪4については、平坦部の幅は狭いものの南北に伸びる造りとなっていることから帶曲輪と考えられる（第33図）。

曲輪5の平坦部は、通路用として用いられたと考えられる犬走りであり、北側盛土付近から南側の土塁まで原形をよく留めている。曲輪6と曲輪7の連続性については、調査からは得られなかつたが、曲輪4と曲輪6の標高は51m前後に位置していることがわかった。以上のことから平ノ前城跡の曲輪については、全体的な造成は甘いが、東西方向には計画性を持って曲輪を配した可能性が指摘される。

しかし、北側に残る主曲輪や帶曲輪については、今回の調査対象範囲外であったため、曲輪全体の配置については課題が残った。また、遺構や遺物から山城の年代特定を行うには限界もあり、鈴田川や本明川周辺に点在する中世山城の追加調査や城館調査によって、すでに明らかとなっている遺構・遺物などとの比較検討が必要であろう。更には県内全体に残る境目地域における山城の縄張りや時代背景を再検討することで、戦国期における大村氏の対外関係の一端を明らかにできるだろう。

謎に包まれた平ノ前城跡は、今回の九州新幹線西九州ルートの建設工事に伴い、土塁や堀切などの主要な遺構部分は残念ながら失われてしまうが、発掘調査で得られた情報は今後の中近世城館の研究に一石を投じるものと期待される。

III まとめ

平ノ前城跡の本調査では、期待された建物跡や柵列などの新たな遺構を見出すことは出来なかつたが、山城本体の曲輪、切岸遺構、土塁、堀切、堅堀の調査から築城当時の土木技術や生活の一端を窺える資料を得られたことは、平ノ前城跡の機能や役割を考察するうえで、貴重な成果となつた。

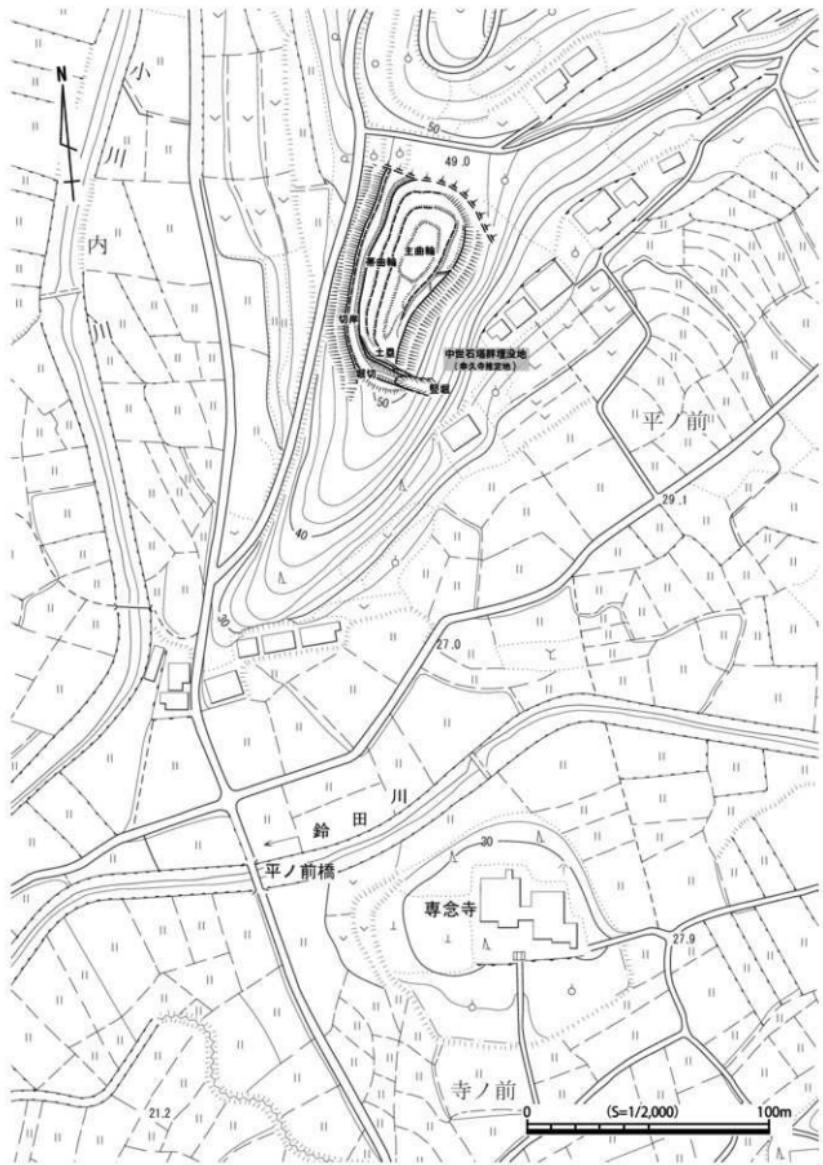
平ノ前城跡は「郷村記」に記載がなく、当時の文献資料も乏しいため、築城経緯や城主も不明のままであるが、平ノ前城跡の活動年代は、山城の縄張り形態や出土遺物の様相から中世・戦国期にあたる15世紀後半～16世紀であったと推定される。しかしながら、今回の調査では山城の主郭部分と想定される北側頂上部の主曲輪の大部分は調査対象外のため、山城の全体像を掴むまでには至らなかつた。

一方で、遺構の土層観察や出土遺物の傾向から得られた情報としては、次のような点があげられる。

- ①遺物包含層にあたる2層から3層にかけて出土遺物が多く確認されていることから、3層上面を遺構面、2層を二次堆積層として捉えることができる。
- ②土塁に用いられた盛土は、堀切や堅堀を掘削した際に出土した4層にあたる砂岩岩盤層を転用する。
- ③全体的に曲輪の造成は甘いが、幅の狭い帯曲輪を楕円状に配し、切岸と土塁で生活面と防御面を区切る。しかし、切岸遺構に伴う石積みは風化砂岩礫を乱雜に積み脆弱である。
- ④出土遺物の多くは、曲輪部から出土し、堀切以南からは極端に少なく、近世期の碗と甕の胴部がわずかに確認されただけにとどまる。山城の活動範囲としては、南端のなだらかな尾根筋は含まれない可能性がある。
- ⑤出土遺物の多くは碗・皿類といった食膳具が7割を占める。調理具に含まれる資料としては、須恵質の捏ね鉢や瓦質の鍋・釜に相当する資料が確認されており、一定の生活は可能である。しかし、当時の貯蔵具は確認されていないことから、その性格は長期滞在型の山城ではなく、非常時の際に臨時に用いられた山城の側面が強い。

発掘調査の結果からは以上に述べた点が指摘されるが、推測の域を出ない部分もあるため、今後の課題として検討の余地を含む。また、東側斜面及び低地から発見されている中世石塔群と山城の関係を示すものは未だにわかっていない。大村藩編纂の『郷村記』には、鈴田村の「古寺跡之事」の項に専念寺の裏に幸久寺とあるが、「何寺共不知 今田地と成る」とあり、それ以上の資料は確認できない状況である。現在は、人家や田畠となっている山城の東側低地部分に幸久寺があつた可能性は高いものの寺院の正確な位置と規模までは不明である（第33図）。

今回の調査で出土した緑泥片岩製の宝篋印塔相輪部は、石造物に詳しい大石一久氏の見解によると建塔年代は15世紀頃のものではないかと指摘されている。また、専念寺境内で確認されている溶結凝灰岩製塔の相輪欠欠は14世紀代半ばから後半頃と考えられていることから、平ノ前一帯に中世寺院が存在していたことは確かなようである。このことから山城と寺院との前後関係を出土遺物などから考察すると幸久寺が平ノ前城築城以前から存在していた可能性が高く、キリスト教の洗礼を受けた大村純忠が統治する天正2年（1574）に行われたとされる寺社破壊によって廃寺になったと考えられる。平ノ前城跡の廃絶時期については、元和元年（1615）の一国一城令による破却・廃城に伴う時期が下限と考えられるが、それより以前にすでに廃城となっていた可能性もある。いずれにしても寺院と山城あるいは館跡とのセット関係も含めて、遺跡の年代観については更なる検討が必要である。



第33図 平ノ前城跡縄張図 【林隆広氏作図を基に作成】(S=1/2,000)

【註】

- (註 1) 東播磨系須恵器鉢：中世土器研究会事務局 2015 「東播磨系須恵器の分類と編年」『中近世土器の基礎研究 26』
- (註 2) 青磁 : 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』
- (註 3) 白磁 : 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』
- (註 4) 染付 (青花) : 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』
- (註 5) 染付 (青花) : 繁伸一郎 1995 「中世後期の貿易陶磁」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- (註 6) 肥前磁器 : 中野雄二 2000 「波佐見焼」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- (註 7) 陶器 : 東中川忠美 2000 「陶器の編年4. 壺・甕」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

【参考文献】

- 長崎県立長崎図書館資料刊行部編 1960 『大村藩郷村記（第七卷）』
- 徳永貞紹 1990 「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会
- 宮崎貴夫 1991 「坂口館跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VII』長崎県教育委員会
- 村川逸朗編 1991 『直谷城跡』吉井町文化財調査報告書第1集 吉井町教育委員会
- 久村貞男編 1997 『武辺城跡発掘調査報告書（第二次）』佐世保市教育委員会
- 鈴柄俊夫 1997 「土製煮炊具にみる中世食文化の特質」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集』国立歴史民俗博物館
- 鈴木公雄 1999 『出土錢貨の研究』東京大学出版会
- 川瀬雄一編 2000 『沖城跡』諫早市文化財調査報告書第14集 諫早市教育委員会
- 松岡進 2002 『戦国期城館群の景観』校倉書房
- 山上雅弘 2002 「戦国時代前半の中世城郭の構造と変遷」『新視点 中世城郭研究論集』新人物往来社
- 川口洋平編 2002 『筑島城跡』長崎県文化財調査報告書第167集 長崎県教育委員会
- 佐世保市史編纂委員会 2002 『佐世保市通史編（上巻）』佐世保市
- 秀島貞康編 2004 『尾と谷城跡』諫早市文化財調査報告書第16集 諫早市教育委員会
- 田上勇一郎編 2004 『博多87』福岡市埋蔵文化財調査報告書第758集 福岡市教育委員会
- 川内野篤編 2005 『針尾城跡』佐世保市教育委員会
- 千田嘉博 2006 『戦国の城を歩く』筑摩書房
- 長崎県教育委員会 2010 『長崎県中近世城館跡分布調査報告書I』長崎県文化財調査報告書第206集
- 長崎県教育委員会 2011 『長崎県中近世城館跡分布調査報告書II』長崎県文化財調査報告書第207集
- 林隆広・河合恭典編 2011 『諫早家御屋敷跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第2集 長崎県教育委員会
- 寺田正剛編 2008 『削木城跡』長崎県文化財調査報告書第197集 長崎県教育委員会
- 矢部倉吉 2009 『小銭と紙幣』金園社
- 矢眞都子編 2011 『八幡山城跡』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第6集 長崎県教育委員会
- 町田利幸編 2012 『尾と谷城跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第7集 長崎県教育委員会
- 大村市史編さん委員会 2014 『新編大村市史 第二巻（中世編）』大村市
- 堀内和宏編 2017 『今富城跡』新幹線文化財調査事務所調査報告書第9集 長崎県教育委員会
- 中尾篤志編 2018 『三城下跡』新幹線文化財調査事務所調査報告書第8集 長崎県教育委員会

附編 『領境に位置する鈴田村と平ノ前城跡』

1. はじめに

平ノ前城跡の活動年代は、発掘調査で出土した貿易陶磁や縄張りの状況から 16 世紀半ば～後期が推定されるが、平ノ前城跡の築城者は一体誰で、いつ築城されたのか。また、そもそも大村氏の影響下にあった山城であったのか。今のところ当時の文献資料から得られる情報はほとんどなく、謎に包まれた山城と言っても過言ではない。

平ノ前城跡の活動年代の下限としては、やはり元和元年（1615）の一国一城令による破却・廃城に伴う時期が考えられる。しかし、前述のとおり大村藩が江戸後期に編纂した「郷村記」にも記載がなく、限られた情報を紐解いていくには限界がある。そこで、平ノ前城跡が立地する鈴田地区に着目し、その歴史的背景から領境に位置する山城について、若干の検討を行う。

2. 在地領主・鈴田氏の支配と鈴田村

大村藩領の「地方」地区南部に位置する鈴田村は、中世から在地領主であった鈴田氏の所領であったと伝えられている。古くは今里村と称していた時期もあるが、大村湾の入口にあたる針尾・瀬戸の在地土豪であった針尾氏とも関わりがあったとされる（瀬野 1980 「長崎県史 古代・中世編」）⁽¹⁾。

郷村記に記された「鈴田之事」には、「邑中地形平坦にして、田畠野廣く、山寡し、土地至て豊饒なり」とある。このことから鈴田村は、郡川周辺部に広がる平野部に次いで、田畠も広く豊饒の土地であったことが窺える。近世期の大村領を描いた「大村管内絵図（大村藩領絵図）」⁽²⁾の地方部に記された上鈴田村をみると鈴田川や小川内川周辺には私領の田畠が点在していることがわかる。

鈴田氏の中でも文献上にその名が確認されている人物として、鈴田道意があげられる。鈴田道意は、越前守純種と称し、大村純治に仕え、妻には純治の娘を娶っている。鈴田氏は 15 世紀頃から大村領内において、活発な動きを見せており、その背景には大村氏との縁戚関係（第 34 図）による結びつきが大きく関与しているものと推測される（外山 1997, 久田松 2014 『新編 大村市史 第二巻』）⁽³⁾。以下、久田松氏の論考を参考に記述する。

大村純治の子である純伊の治世になると、有馬氏との勢力争いが起こり、不穏な状況の中で、文明年間に中岳合戦が生じ、純伊は合戦に敗れて加々良島に逃走したと言い伝えられている。この合戦において、敗戦の要因となったのは、鈴田道意による純伊への裏切り行為であったとされる。当初、大村配下の武将として参陣したものの、途中から有馬氏側に寝返ったことで、大村方は総崩れとなり、大敗した。その後、純伊は数年間の潜伏生活を余儀なくされている。しかし、純伊が大村に帰還した後も鈴田道意は、大村氏配下の武将として加わっている。さらには、純伊の子である純前の側室に道意の娘が迎えられており、大村氏との深い結びつきが継続していることを窺わせている（第 34 図）。

天文年間中（1540 年代）の大村館町の様子を描いたと考えられている「大村館小路割之図」という町絵図が現存している。それによると、大村館周辺の一門衆が集中している屋敷区画に「鈴田越前」と「鈴田新三郎左馬亮」の名を確認することができる。鈴田越前は道意を指しているものと思われる。鈴田新三郎左馬亮と道意との関係性は不明であるが、鈴田一門であった可能性は高い。この鈴田新三郎左馬亮は、永禄 4 年（1561）「肥前日記」の伊勢大麻を受けた且那衆の一人であり、当時の大村家

家臣団の中でも中枢に位置していたことは確かである。しかし、永禄10年（1567）以降の「肥前日記」には鈴田氏の名は見られなくなっている。永禄4年（1561）～永禄10年（1567）のわずか7年の間に大村ではどのような変化があったのだろうか。注目すべき点は、永禄6年（1563）に純忠が重臣25人とと共にキリスト教の洗礼を受けたことで、大村領内では宣教師による活発な布教活動の結果、キリスト教へ入信するものが増加している（松田・川崎 1979）⁽⁴⁾。また、横瀬浦や福田浦の開港（1562-1565）を通じて、純忠がポルトガル船の誘致を積極的に行い、海外貿易によってもたらされる鉄砲などを入手することで、周辺の在地領主との主権争いにおいて優位に立とうとする思惑が垣間見える。

元亀元年（1570）10月21日のイエズス会士フィゲイレド書簡（イエズス会士日本通信）には、純忠の受洗後、間もなく鈴田村の臣下270人が受洗の準備を進めており、純忠も受洗が円滑に進むよう、長崎から神父を鈴田村に派遣し、便宜を図ったことを伝えている（瀬野 2001）。

純前の実子である貴明の母は、道意の娘である。本筋ならば貴明が家督を継ぐはずであったが、有馬晴純の次男であった純忠が、次の家督を継ぎ、貴明は武雄領主後藤純明の養子に出されている。これを契機として、大村氏と鈴田氏との関係に変化が生じていったと推測される。純忠の時代に入ると周辺の在地領主との既得権益の争いが激化する中で、後藤家に養子に出された貴明は、龍造寺氏や松浦氏と手を結びながら、たびたび大村領内へ侵攻し、終生純忠を脅かす存在として戦国の世を生き抜いている。

鈴田氏の動向としては、前述の「大村館小路割之図（大村市立史料館所蔵）」や「肥前日記（神宮文庫所蔵）」などから15世紀後半～16世紀中期までは文献資料で確認できるため、鈴田村の支配は鈴田氏の影響下にあったと思われる。また、領内にあった岩松城跡や白鳥城跡は、諫早方面からの敵の攻撃を防ぐ目的で鈴田氏によって築かれた山城・砦であったとの言い伝えが残る。大里町・内倉には鈴田道意の館跡と墓が伝わっており、角柱型の墓碑には「蘭江道阿居士」と刻まれている（図版13-14）。

16世紀後半～17世紀初期にかけて鈴田村の所領者として確認できるのは、純忠の二男で藩主大村喜前の弟であった大村何右衛門純宣である。大村何右衛門純宣は、鈴田姓を名乗り、鈴田氏の旧領をそのまま引き継いだと考えられる⁽⁵⁾。慶長4年（1599）の「慶長高帳」による石高は、家中第一の1,676石4斗2升5合を有し、鈴田村は単独の知行地（907石6斗1升3合）であったことが知られている。

しかし、慶長12（1607）の「御一門払い」の断行により、大村家庶子一門の多くが知行地を没収・半減されており、大村何右衛門や三浦村を知行地としていた大村善次郎の二家は、知行地を半減されたうえ、離嗣断絶や乱心があり絶家となっている（藤野 1973『長崎県史 藩政編』）。また、大村何右衛門の下屋敷は、現在の鈴田牢跡付近にあったとされ、何右衛門没後の元和3年（1617）～元和8年（1622）にわたって捕らえられた宣教師らを収容していた（瀬野 2001）⁽⁶⁾。

3.郷村記に残る鈴田地区の字名

郷村記・鈴田村の項にある「村境他領境並海邊之事」の記述をみると鈴田村や三浦村の字名が記されており、当時の村境や領境を知ることができる。

[史料1]

- 一 鈴田村・三浦村・諫早領三方境硯石傍爾石より鈴田村・大渡野村高来郡内佐賀領 久原分大村之内三方境境の塔まで毫里拾七町三拾七間、此間佐賀領との境なり

- 一 鈴田村・大渡野村高来郡内佐賀領 久原分大村之内三方境境の塔より海邊与崎新田井樋まで壱里
貳拾六町五拾五間、此間久原分との境なり

上記の〔史料1〕の三方境硯石は、風観岳の入口に近い場所にあり（図版14-⑦）、現在でも領境石（従是東佐嘉領 従是西大村領銘）を見ることができる。三方とは、諫早領の大渡野村と破籠井村、大村領の鈴田村の境を示している。字図では、「千部」「イラノ迫」付近に位置し、江戸時代の主要幹線道路である長崎街道が通り、藩境を示す三角塚（筋塚）がある。大村藩領は丸塚、諫早領は四角塚となっている。大村領に少し進んだ場所には、四方を石垣で築いた「駕籠立場跡」があり、当時の面影を今に伝えている。（図版14-⑥）

与崎新田井樋は、鈴田川の河口部にあたり、当時から潟が広がる湿地帯であったことがわかる。鈴田村郷土誌（1918）には、明治9年（1876）の地区改正の際に与崎潟を大村町（久原郷）に割譲したことが記述されている。従って明治初期までは、与崎（潟）までが鈴田村の村域であった。

〔史料2〕

「白鳥川より鈴田川本川・・・まで壱町拾五間、此間左右浅田の田原・林・人家あり、此大川の左北の方壱町程の所に古城の跡あり、今は林となる・・・同本川より舞木（「苦木」の間違いか？）と云所まで五拾五間半、左右浅田の田原、此所上鈴田・下鈴田の村境なり・・・宮園より北の方四町程の所に西光寺山という所に古城の跡あり」

〔史料3〕

「横目役所より東の方諫早領尾和谷村へ行く細道あり、諫早領境たんご（丹後ヒラか？）と云所まで拾町余、壱駄荷通る、たんごより尾和谷江行程壱町余、一騎通りの難所なり」

〔史料2〕に記載された古城は、「白鳥城跡」と「西光寺山城跡」と考えられており（第8図）、鈴田村の「古城跡之事」に山城の規模を示す記述が残されている。それによると白鳥城跡には、「・・・横三間深さ武間程の堀切の路三ヶ所あり今は林となるなり」とあり、横約5.5m、深さ約3.6mの堀切が3つ備わっていたことがわかる。白鳥城跡は北に白鳥川、南に鈴田川に挟まれた急傾斜の尾根上に築かれており、西側も断崖になっていることから天然の要害地であったことが窺える。現在は高速道路の開通や宅地造成によって、当時の遺構は失われており、残念ながら原形を留めていない状況である。

もう一つの西光寺山城跡については、正確な場所は今もわかつていない。平ノ前城跡の西南にあり、鈴田小学校から北東側に位置する丘陵地付近一帯にあったと考えられており、現在は千本桜公園として市民に親しまれている。

〔史料3〕からは、横目役所（下鈴田庄村屋）から諫早領尾和谷村に抜ける細道があったことを伝えている。「大村管内絵図（大村藩領絵図）」を見ると岸高の東方向（諫早領内）に「丹後ヒラ」の記載があることから、岸高からムレにかけて尾和谷方向へ抜ける道があったことが窺える。現在の国道34号線から伊勢山の北東方向にあたる道筋で、多良岳西部広城農道に通じる付近と思われる。

字図を見ていくと地形の成り立ちや当時の人々の暮らしを想像させる地名が今でも残っている。字図からは、その土地の歴史や風土が垣間見え、現代に生きる私たちに失われた当時の原風景を今に伝

えてくれる貴重な情報源となっている。鈴田・三浦地区にも「犬ノ馬場」「惣原」「醬油園」「麻畠ノ迫」「庄屋平」など生活の中で根付いた地名や地形をはじめ建物、動物、交通に因む字名もいくつか散見される（第35図）。興味深い字名としては、平ノ前の近くに「射場^{ササ}」の字名がある。「射場」の字名からは、「弓」に関係する場所であったことが想像されるが、具体的にどのような場所であったのだろうか。

「大村の地名の成り立ち（2010）」の著者である福田正三郎氏によると、周辺一帯が穀倉地帯であることから吉凶を占う正月行事が行われた場所であると指摘されている。このような行事を民俗学では、一般的に「百手祭り」と呼称している。百手祭りは、かつてはどの集落でも行われていた年中行事の一つであったが、今ではほとんど見かけなくなった行事である。しかし、諫早市破籠井町にある熊野神社では、毎年2月1日に百手祭りが行われており、五穀豊穣、厄除退散、厄払い神事として代々、地域の人々に大切に受け継がれている。鈴田村に残る「射場」の字名は、こうした「百手祭り」を執り行う神聖な場所であった可能性が高い。また、鈴田川の上流にあたり、諫早領に近い場所に「矢櫛」という地名がある。矢櫛とは矢を入れる箱の意で、周囲は断崖地形の細長い谷筋となっている。付近には、「神山」の字名や旧大神宮があった岸高の伊勢山がある。こうして見ると平ノ前城跡周辺の字図には、信仰の名残が断片的ながら認められ、今は無き近世以前の姿を留めていると思われる（図版14）。

4. 発掘調査からみた鈴田地区と平ノ前城跡

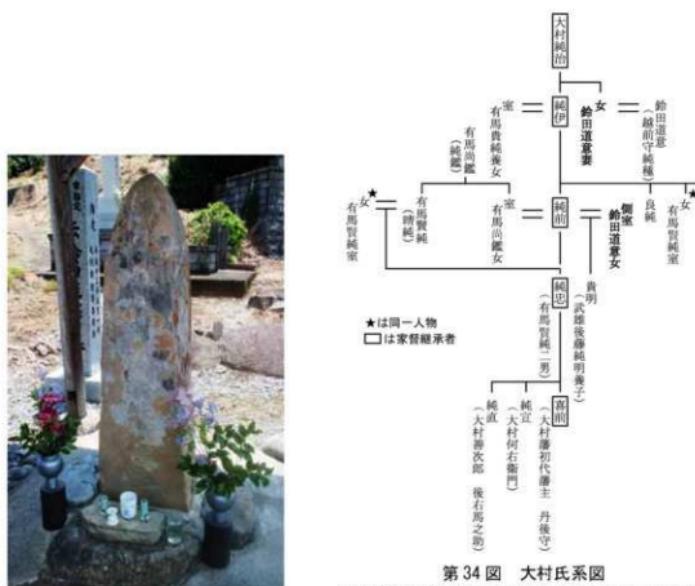
長崎県下においてこれまでに確認されている城館の数は、約600ヶ所を数え、その内の約2割が県央地区に分布している。このうち大村市内では、約30ヶ所の砦・館・城跡が含まれている。

大村市に分布する中世城館跡を俯瞰すると郡川流域と鈴田川流域に偏在する傾向にあり、更に北部の東彼杵郡に位置する波佐見町と川棚町を横断する川棚川流域にも中世山城が確認されている。これらの中世城館跡の分布状況から当時の大村氏の防衛拠点や山城の立地環境を窺うことができる。

立地環境に関しては、中小規模の河川を一つの防衛ラインとして、周囲を一望できる山間部や低丘陵地に砦や山城を築く一方で、下流域に分布する傾向からは海上交通路を意識した立地環境にあったと考えられる（寺田2014『新編 大村市史 第二巻』）。鈴田川流域に点在する山城群もこうした河川や海上交通路を意識した場所に築かれている。

平ノ前城跡から出土した貿易陶磁には、龍泉窯系青磁、景德鎮窯青花、漳州窯系青花といった中国産の貿易陶磁が含まれていることから16世紀中後期における大村氏の海外貿易による恩恵を反映しているものといえる（宮崎1994）⁽⁷⁾。また、佐世保市教育委員会によって発掘調査された針尾城跡からは16世紀を中心とする多量の貿易陶磁が見つかっているが、景德鎮窯系の白磁皿、唐草文染付皿（玉取獅子）や漳州窯系の染付皿（基筒底）など共通する遺物も見られ、平ノ前城跡出土の遺物年代を検討するうえで、参考となった。

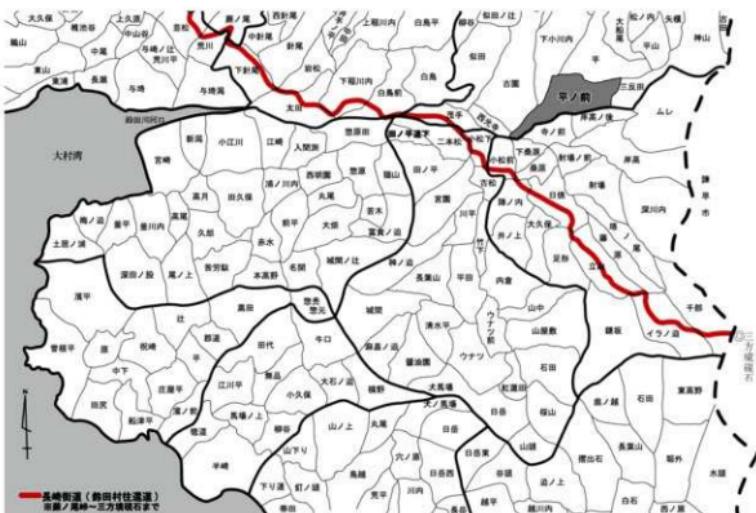
平ノ前城跡が立地する鈴田地区は、特に中世以降、諫早領と大村領の境目地帯であったことから、支配者層の影響を受けながら軍事・交通の要衝地あるいは緩衝地帯として、特異な歴史的背景を持つ地城であったことが、発掘調査によって浮かび上がってきた。鈴田川流域の山城については、まだ解明されていない部分も多く、今回の平ノ前城跡の発掘調査をきっかけとして、これまであまり注目されてこなかった16世紀における鈴田地区的歴史や文化を見つめ直す嘴矢となれば調査に関わった担当者として幸いである。



図版 13 伝 鈴田道意墓

出典：『寛政重修諸家譜』第四種 第七百四十六。『新編 大村市史第二卷（中世編）』
括弧の大村氏系図などを参照して作成。

第34図 大村氏系図



第35図 平ノ前城周辺字図

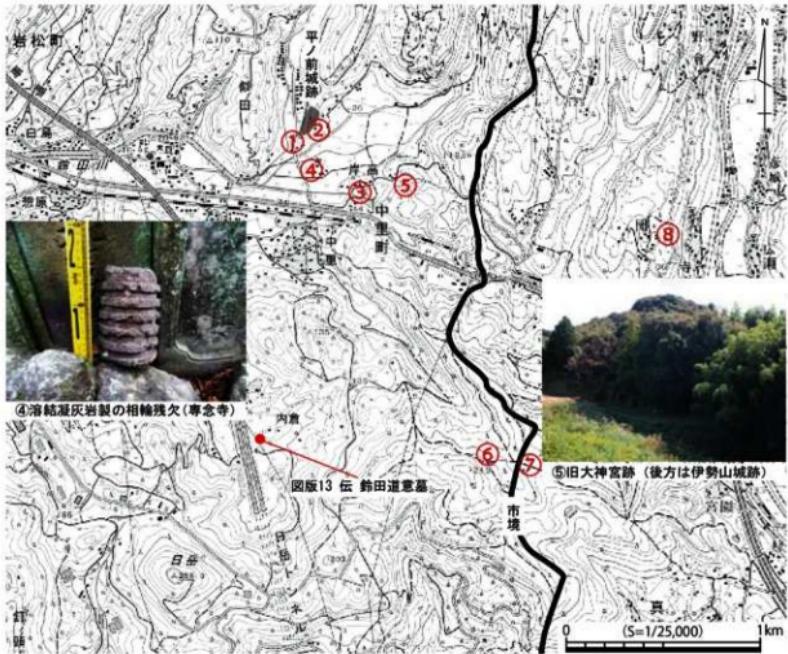
出典 正三郎著『大村の地名の成り立ち 1,200 の字地図』を基に作成



① 緑泥片岩製の石塔台座

② 東側低地に残る中世石塔

③ 岸高城跡



⑥ 駕籠立場跡



⑦ 大村領と諫早領の領境 (Three-sided stone marker at the border between Oita Domain and Chikugo Domain)

※前頁第35図参照

⑧ 尾和谷・開の辻に残る六地蔵石幢

図版14 平ノ前城跡周辺の主な史跡

【註】

- (註1) 嘉暦4年(1329)7月3日の東福寺領肥前国鉢杵庄文書目録(「正慶亂離志文書」)によれば、針尾兵衛入道覚実という人物の所領地として、江上、小觸、鈴田の地名が記されている。江上は現在の佐世保市の江上、小觸は針尾島、鈴田は大村市の鈴田と考えられている。鈴田の地名には「針尾」の字名が今でも残っている。
- (註2) 長崎歴史文化博物館が収蔵する「大村管内絵図(大村藩領絵図)」は、主に西彼杵半島を中心とする「島方」と東彼杵郡を描いた「地方」の2枚から構成されており、当時の土地利用の状況が詳細に記されている。絵図の正確な作成年代は不明であるが、文化11年(1814)に大村藩による行政改革に伴い、上鈴田村と下鈴田村は統合されて1村となった。しかし、絵図には上下鈴田村と庄屋が記載されていることから文化11年以前の大村領を描いたものと推測される。
- (註3) 戦国期における大村氏の系団をみると、有馬氏との縁戚関係が注目されるが、鈴田の在地領主であった鈴田氏と大村氏の縁戚関係に有馬氏が介入したことで、鈴田氏の影響力が低下したことが考えられる。
- (註4) フロイスはキリスト教の布教活動において、最も成果が得られた地として鈴田村の改宗を挙げている。
- (註5) 鈴田氏の家臣に系譜をひく鈴田給人も純宣の家臣に編入されたと思われる。大村家史料の一つである「見聞集(巻十二)」には、御一門払いによって石高を半分没収された大村何右衛門純宣の記述が残されている。それによると鈴田姓を名乗り、桜田屋敷(玖島城下内)に居住したことや無嗣子によって断絶の憂き目にあったことが記されている。
- (註6) 1619年のガスバル・ルイス書簡(日本イエズス会年報)によれば、大村の牢獄には、当時の長崎奉行であった長谷川種六によって捕縛された6人の修道者がいたことを伝えており、長崎奉行の命で公儀牢の新築がなされている。
- (註7) 14世紀から15世紀の大村湾沿岸の遺跡における中国産陶磁器の出土量は、貿易管理統制の強化や明の海禁政策の影響もあり、減少する傾向がみられる。一方で、16世紀に入ると貿易陶磁の種類・量とともに増加し、景德鎮窯や漳州窯の染付が目立つようになる。

【引用・参考文献】

- 鈴田尋常高等小学校編 1918『東彼杵郡 鈴田村郷土誌』
本野尋常高等小学校編 1918『北高来郡 本野村郷土誌』
長崎県立長崎図書館資料刊行部編 1960『大村郷村記(第七卷)』
長崎県史編集委員会編 1973『長崎県史 藩政編』吉川弘文館
松田毅一・川崎桃太訳 1979『フロイス・日本史9』中央公論社
長崎県史編集委員会編 1980『長崎県史 古代・中世編』吉川弘文館
宮崎貴夫 1994「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題」『長崎県の考古学』長崎県考古学会
満井録郎 1997「県立長崎図書館蔵『大村藩領絵図』解題」『九葉実録 別冊』大村史談会
外山幹夫 1997『肥前 有馬一族』新人物往来社
瀬野精一郎編 2001『長崎県の地名』日本歴史地名体系第43巻 平凡社
川内野薫編 2005『針尾城跡』佐世保市教育委員会
福田正三郎 2010『大村の地名の成り立ち -1,200 の字地図』
大村市史編さん委員会編 2014『新編 大村市史 第二巻 中世編』大村市
大村市史編さん委員会編 2015『新編 大村市史 第三巻 近世編』大村市

報告書抄録

ふりがな	ひらのまえじょうあと
書名	平ノ前城跡
副書名	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	X
シリーズ名	新幹線文化財調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第10集
編著者名	一瀬勇士
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市尾上町3番1号 TEL095-824-1111
発行年月	西暦2019年3月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらのまえじょうあと 平ノ前城跡	ながさきけん 長崎県 おおむらし 大村市 ひらまち 平町 1543-3 番地 他	42205	204	32° 53' 30"	130° 0' 3"	20161207～ 20170208 20170524～ 20170831 20171115～ 20180130	220 1200 1040	九州新幹線 西九州ルート（長崎ルート）の路 線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平ノ前城跡	城館跡	戦国時代	・曲輪 ・土塁 ・切岸 ・堀切 ・堅堀 ・石積み	・陶磁器 (貿易陶磁) ・石製品 (石塔) ・金属器 (銭貨)	諫早市と大村市の 境目に位置する中 世山城跡。曲輪 を中心16世紀 中頃～後期にかけて の貿易陶磁が 出土した。

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第10集
九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書X

平ノ前城跡

平成31（2019）年3月発行

発行者 長崎県教育委員会
〒850-8570 長崎市尾上町3番1号
TEL 095-824-1111

印刷所 オムロプリント株式会社
長崎県大村市原町84-3
TEL 0957-54-7000